

教育部檢定
師範學校國語教科書

5a
810
大12

師範學校

吉田彌平編

國文教科書

東京 光風館藏版

本科用

卷二

教
51
200

42664

教科書文庫

4
810
51-1924
20000
65472

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches
1 2 3 4 5 6 7 8
cm
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

濟定檢省部文
書科教科語國校學範師 日七月一年三十正大

教科書文庫
4
810
51-1924
2000065472

5a
810
大12

師範學校

國文教科書

吉田彌平編

本科用

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000065472



師範學校 國文教科書 本科用卷二

目次

一	月の天橋	……………	徳富健次郎	一頁
二	空行く雁	……………	〔曾我物語〕	七
三	田園雜興	……………	大町桂月	二
四	武藏野	……………	國木田獨步	七
五	ベスタロッチ	……………	澤柳政太郎	三五
六	伊藤公ヲ誅ブ	……………	井上馨	三五
七	本多重次	……………	新井白石	完

目次



八	利根川の秋曉	徳富健次郎	四
九	巡禮唄	近松半二	四
一〇	見よや春	渡邊華山	五
一一	山室と鈴屋	芳賀矢一	六
一二	遼東の月	小笠原長生	六
一三	アルプス越その一		六
一四	アルプス越その二		七
一五	壺	柴田鳩翁	八
一六	雪前雪後	幸田露伴	九
一七	白椿	與謝野晶子	九
一八	古今千遍	雨森芳洲	一〇

一九	四季の月	石川依平	一七
二〇	三浦路	川上眉山	一八
二一	忘れ難き日	姉崎嘲風	二七
二二	友に寄す	高山樗牛	三三
二三	空中戦その一	菊池寛	三七
二四	空中戦その二	菊池寛	三三
二五	空中戦その三	菊池寛	四〇
二六	表忠塔		四五
二七	梅	藤岡作太郎	五五
二八	鶯	島崎藤村	六一
二九	村上義光	〔太平記〕	六一

三〇 殿中の刃傷	村上浪六	一五
三一 松島	田山花袋	一六
三二 氷川清話	勝海舟	一八
三三 南洲遺訓	西郷南洲	一五
三四 西郷南洲論その一	尾崎行雄	一六
三五 西郷南洲論その二	尾崎行雄	二〇

附録

第二篇 漢字

一 漢字の起原	一
二 漢字の變遷	七
三 漢字の形體	八
四 漢字の部首	八

師範學校 國文教科書 本科用卷二

徳富健次郎

文學者。蘆花と號す。明治元年生。

一月の天橋

徳富健次郎

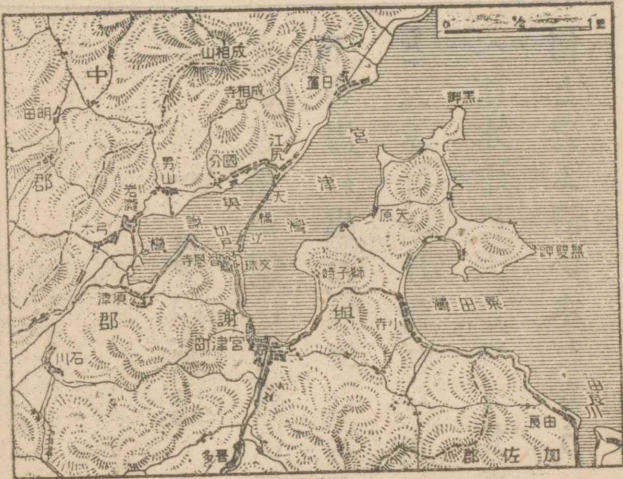
きいと櫓が響いて、舟は墨染の濃い松陰から白々とした月下の海に出た。海と云つても、浅い洲の上の水である。何と云ふ好い月夜だらう。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて其處にも月は壁の如くに光つて居る。何と云ふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。我等は今天河を渡つて居るのではあるまいか。

船頭よ、徐かに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。

併し、如何程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するくと舟はもう切戸の渡をこして、天橋の渚に着いてしまつた。

舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植ゑついで間もないと見えて、松は稚木で、疎らである。月光に雪

と輝く砂を踏んで次第に奥へ入つて往く。歩むにつれて、松影は段々深くなり、はては、月光より松の影が多くなつた。

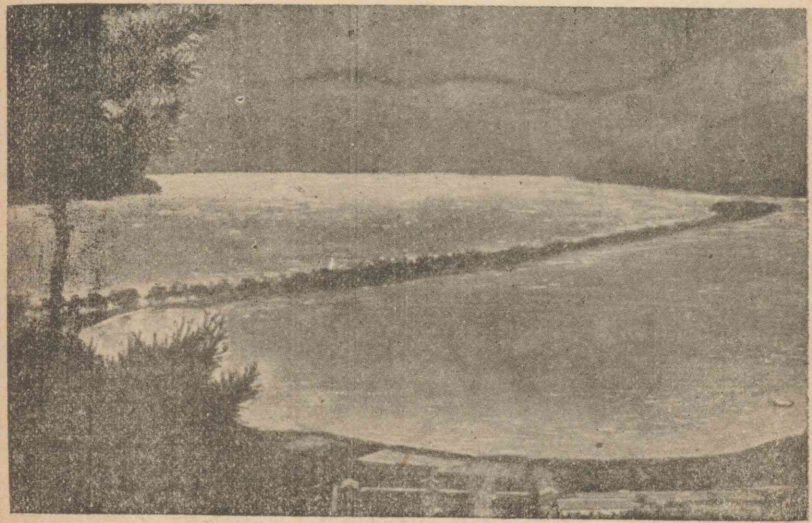


天橋立附近地圖

何と云ふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉々々が白金のピンを敷へる様に讀まれ、俯く砂には、又一葉々々の影が黒く鮮かに讀まれる。

松原の路の曲る處に出た。暫し松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋に人籟絶えて、唯何處からともなくざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨で描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐める響に、外ならぬ。其の響にひかれて、汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰を掛ける。月下にはほの白く眠る與謝の海、其の懷には璧の様な月を抱き、寢息かとはかりざぶり、又ざぶりと、白砂にこぼ

松原の路



天の光が點々と灣を縁取つて居るのは、即ち宮津町である。橋ふと此方の海の上に不思議なものが見れた。きら／＼とした明珠の幾段にも列んだ、たかたか 彪大な横長い物である。龍宮城の出現かと見る間にそれは宮津の方へと動いて

行く。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城は彼の宮津灣頭百千の龍燈きらめく邊にびたりと附いてしまつた。龍宮城が移動すると見たのは、即ち今日の最終の連絡船が宮津を指して行つたのであつた。あとは唯、熨した様な與謝の海、照りまさる月の空と靜かに相抱いて、一里の松原枝も鳴さぬ天橋立の長い汀に傍うてさぶり又さぶりと、漣の、ささめくばかりである。

汀から松原に戻つて、また奥へ／＼と砂路を歩む。さくさくと砂を踏む足音の絶間に、波の、さゝめきが慕つて来る。幽かに蟲の音がする。松影は益深くなつて、はては砂の上に、零れる月影がちら／＼と螢ほどに細かく、疎らになつた。

橋立明神
もとは興謝宮
とて切戸の文
珠堂の邊にあ
りしならんと
いふ。

と見ると、こゝにひつそりと鎮まります社がある。大方橋立明神と云ふのであらう。松影を浴びた其の宮には、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つて居ない。余は其處の松に倚りかゝつて良久しく歸るを忘れて居た。大分經つて、松影から月下に出て、砂路をぶらりくくと切戸の渡に來た。切戸の水は全く銀河の如く清い。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い燈が見える。文珠の渡守の小舎の燈である。

「おゝい」と渡守を呼ぶ余の聲が震へて銀河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて暫く其の燈を眺めて居た。(死の蔭に)

二 空行く雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて消入るばかりなり。母泣くくのたまひけるは、「あの曾我殿こそ己らが父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらん狩場より歸りたまふ道にて工藤一藹とやらんに射られて死

一萬
後に曾我十郎
祐成。
箱王
後に曾我五郎
時致。
曾我祐成
曾我時致
河津祐泰
伊東祐親
工藤祐家
工藤家次
伊東祐次
工藤祐經
曾我殿
曾我太郎祐
信。一萬箱王
の母、夫河津
三郎祐泰の死
せし後兩兒を
伴うて祐信に
再離す。

工藤一庸
左衛門尉祐經
鎌倉殿
源頼朝

此の里
相模國足柄上
郡曾我莊

にたまひぬと兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の
切り者にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり伊豆より鎌倉へ
上る時もありとや。我らをも殺さんとや思ふらん。我等
が此の里にあるを知らでや過ぐらん。なご大人しく語れば、
母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。
かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりける
に兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがね
の南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たま
へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞまじへぬ。五つあるは
一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物いはぬ
鳥類だにかくの如し。我ら人倫に生れながら、和殿は弟、我

は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬ
こそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と申してありきとか



(繪圖物語我曾重廣) る見雁飛兄弟我曾

や。父だにも世に
おはしまさば、馬鞍
をも賜はり、弓・矢を
も持ちて、今ぞ思ふ
やうに物を射あり
きなん。我々より
幼き者も馬鞍・弓・矢
を持ちて物を射ありく事の羨ましさよ。是等の事ども思
ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせ

らるゝぞや。とて袖に顔を差入れてさめくと泣きければ
 弟も小賢しく顔を合せて泣居たり。一萬の乳母の女房こ
 れを聞きて「あなあさまし。人もこそきけ。いかに和上（若）藹
 たち夜も更けぬるに、さやうにおはするぞ、とくく入らせ
 たまへ。」と恐しげにいひければ、二人のものは門外に逃げ出
 でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りにつけり。
 其の後は二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき
 父を慕ひつゝ語りあはするまではなけれど、唯目ばかり
 を見合せて互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満たざ
 るに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄
 矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のあ

りけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に
 申しけるは、「我らもいつか成長して和殿は十三、我が十五に
 だにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をか
 くの如く差合ひ、射取りたる後には、ともかくもなりなん。
 和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一
 の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟も打領（う）きけり。年ば
 へには恐しき事かなと人々思ひけり。 （曾我物語）

三 田園雜興

大町桂月

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸さんには、先づ我が
 體の健康を復せざるべからず。西郊の地空氣新鮮にして、

大町桂月
 名は芳衛。
 文章家。
 明治二年生。

街上の塵埃到らず。乃ち居をこゝに卜しぬ。一字の茅屋、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。四顧たゞ木立を見て、人家を見ず。環堵蕭然たり。音に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。汽車の便をかりて都門よりかへり來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛び來りてわが手の風呂敷包にぶらさがる。例として土産の菓子あらんことを期するなり。さるにてもわが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥かしけれ。蒸暑き夏の夕涼み臺を無花果樹の下に移して一家晚餐に團欒すれば、竹の葉戰きて涼氣自ら盤上に迸る。一盃の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つなり。今

一つ隣家に飼へる犬のいつも食時を違へず來りてかしこまるあり。その主人近ごろ妻子を残して病死せり。喪家の狗の譬思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨肴なきこと多し、馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にかきたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

おぼつかなげに「とゞとゞ」と呼びて雞に餌を與ふことも亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで集り來り、先を争うて食ふ。雄三羽、雌七羽ばかりあり、種類も一ならず。就中しやもの雌一羽最も慄悍なり。餌を貪ること最も甚だしく、近よるものゝ頭

を嘴にてこづくさま、如何にもにくらしく、他の雞恐れて敢て近よらず。されど最も大にして好き卵を生むものはこのしやもなり。外界ノ事ニ心をつかへず
 われ平生物累なきことを期す。身には惜しきものを帶びず、家にも惜しきものを置かず、身邊の物品すべて用を辨ずるを以て足れりとす。一室の中粗末なる机と書物との外にはまた他の物なし。興來りて筆執り、書を繙き、興盡きて横臥し、煙を吹く。雞、遠慮もなく座に上り來り、机上にたちて啼くことあり。護謨履はきて庭に遊べる小兒いつの間
 にやら履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど雞上らば追ふべきものと心得心得て、おのれは履にて上り居りな

がら、兩手をひろげて雞を追出すもいとあごけなし。その末の子はまだろくに口もきけぬばかりの年頃なり。母の乳にあけば、をりく、我が机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。あまり大人しきにふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹して居ることもあり。かはいや幼兒、清正の猿と相距ること遠からず。

園中兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、たゞ嬉しきなり。

清正の猿
 加藤清正の愛
 養せし猿清正
 の讀みさした
 る論語に筆も
 て塗抹抹せ
 り。清正見つ
 けて「汝も亦
 聖賢の道に志
 すや。」

慾もなし、名利の念もなし。自然に對すれば、始めはその愛すべきを覺え、終にはその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等か神祕の潜めるものゝ如し。而して小兒は人類の中に於て最も自然に近きなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。樂しき我が家の團欒にも猶一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むこと前後僅々十餘年に過ぎず。近年我膝下に侍して奉養することを得たるは一年中の小春日和の如きか。然るにわが病弱の身はその小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なる

親を思ふ
親思ふ心にまさる親心、今日のおとづれ何とさくらん。吉田松陰辭世の歌といふ。

を氣遣ひ、わが食少なきを心配す。「親を思ふ心にまさる親心」と詠じけん、世に子の上げかり親の心をいたましむるものなし。罪ふかきかな、抑不孝の子なるかな。昔廉頗老いてなほ用ひられんとして強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に強ひて餐を加へ、久しく絶ち居たりし晝食さへもものするに至りぬ。食進むやうになりて嬉しとて母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。(春草秋草)

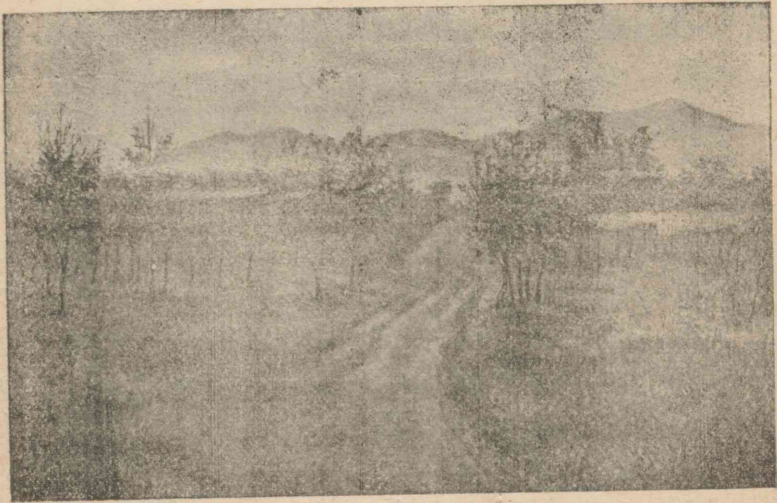
國木田獨歩
名は哲夫。
文學者。
明治四十一年
歿す年三十
八。

四 武藏野

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は路に迷ふことを苦にしてはならぬ

い。どの路でも足の向く方へ行けば必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美はたゞ其の縦横に通ずる數十條の路を當もなく歩くことに由つて始めて獲られる。春・夏・秋・冬、朝・晝・夕・夜、月にも雪にも風にも霧にも霜にも雨にも時雨にも、たゞ此の路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと自分ほしみじみ感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が何處にあるか。林と野とが斯くもよく入亂れて、生活と自然とがこの様に密接して居る處が何處にあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは實に此の故である。



武 藏 野

されば君若し一の小徑を往き、忽ち三條に分れる處に出たなら、人に尋ねるに及ばない、君の杖を立て、其の倒れた方へ往きたまへ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つてまた二つに分れたら、小さな路を擇んで見たまへ。或は其の路が君を妙な處に導く。それは林の奥の古い墓地で、

苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居ることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて君の前に見渡しの廣い野が開ける。足元から少しだらだら下りに成り、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る、萱原のさきが畠で、畠のさきに背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。

若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は青く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水のほとりには枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池のほとりの小徑を暫く往くとまた二つに分れる。右に往けば林、左に往けば坂。君は必ず坂をのぼるだらう。武蔵野を散歩するに、兎角高い處高い處と擇びたくなるのは、自然廣い眺望を求めようとするからではあるが、併し其の望は容易に達せられない。見おろす様な眺望は決して出て來ない。それは初めからあきらめた方がいゝ。

若し、何かの必要があつて、路を尋ねたいとおもへば、畠の中に居る農夫にきゝたまへ。農夫が四十以上の人であつたなら、大聲をあげて尋ねて見たまへ。驚いて此方向き大聲で教へてくれるだらう。若し若者であつたなら、帽を取つて慇懃イキケンに問ひたまへ。横柄に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖なのである。教へられた路を行くと、路が又二つに分れる。教へてくれた方の路は餘りに小さくて少し變だと思つても、其の通りに行きたまへ、突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけぬ。其の時、農家で尋ねて見たまへ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」とすげなく答へるだらう。農家の

門を外に出て見ると果して見覚えある往來なる程、これが近路だなどと思はず微笑をもらす。其の時始めて教へてくれた路の有難さがわかるだらう。

路は眞直で、兩側には十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩むことの樂しさ。右側の林の頂には夕照タマセが鮮かにかゞやいて居る。折折落葉の音がきこえるばかり、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影は見えず、誰にも遇はず。若しそれが木葉の落ちつくした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にかさく〜と音がする。林は奥まで見すかされて、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はな

い。愈淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時々あ
 わたゞしく飛去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。
 同じ路を引返すのは愚である。迷つた處が今の武藏野に
 過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸り
 にも矢張凡その方角をきめて、別な路をあてもなく歩くが
 よう。さうすると思はず落日の美を見ることがある。日
 は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に
 群がる雲は黄金色に染つて、見るがうちに様々の形に變ず
 る。連山の頂は白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つ
 て、終には暗澹たる雲のうちに没してしまふ。
 日が落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は

山は暮れて
 奥謝蕪村の
 句。
 ベスタロッ
 チ
 瑞西の教育
 家。
 (1746-1827)
 澤柳政太郎
 教育家。
 文學博士。
 貴族院議員。
 慶應元年(三
 二五)生。
 ルソー
 佛國の文學者
 思想家。
 (1712-1778)
 ナポレオン
 佛國皇帝。
 (1769-1821)
 フイヒテ
 獨逸の哲學
 者。
 (1746-1832)

暮れんとする。寒さが身に沁みる。其の時は路をいそぎ
 たまへ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放
 つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうで
 ある。突然また野に出る。君は其の時、
 武藏野山は暮れて野は黄昏の薄かな。
 の名句を思ひだすだらう。(武藏野)

五 ベスタロッチ

澤柳政太郎

今を距ること百餘年の昔、佛にはルソーの如きナポレオン
 の如きあり、獨にはフイヒテの如きゲーテの如きあり、政治
 界・思想界及び文學界に立ちて燦然たる光輝を放てる時に

グーテ
獨逸の詩人。
劇作家。
(1749-1832)

當りて、山紫水明、風光秀麗なる瑞西も亦教育界に一大人物を出して世界に大恩惠を施したりき。それを誰とかする。ヨハン、ハインリッヒ、ペスタロッチ即ち其の人なり。渠は、悍鷲に似て亦家鳩の如く、猛獅に似て亦山羊の如く、昔人に似てまた小兒の如く、勇は以て鬼神を欺くべく、愛は以て嬰兒を懷くべく、柔中に剛あり、剛中に柔あり、多面多角、不可思議の賦性を有し、政治問題にまれ、社會問題にまれ、はた教育問題にまれ、苟も人類の位置を高むる事に關して必要なるものならんには、凡て之を攻究精思して餘力を遺さず、遂に教育史上一頭地を抽んで、百年後の今日尙赫々たる名聲を擅にせり。

ペスタロッチの學生にして後に歴史家となれるフリーミンは親戚及び故舊のためにとて著したる其の幼時の回顧録に記して曰く

渠の頭には粗豪にして逆立ちたる毛髪を戴き、面には數多の痘痕を印し、且黄なる斑點は其の全部を蔽ひ、汚れたる鬚髯は長く尖りて芒刺の如く、極めて醜き人にてありき。又渠の頸には絶えて襟飾を纏ひしことなく、足に着けたるは不恰好なる袴弊れたる靴下及び巨大なる靴のみなりき。しかのみならず、其の歩みさまは正整ならず、其の眼は大にして輝くこともあり、或は窪み落ちて半ば閉ちたることもあり、其の顔色は或は深き悲を包みたる

が如く、或は平和の波を湛へたるが如し。其の語る時は忽ちにして緩く且音樂的に、忽ちにして急に且迅雷の如くなりき。これ予らが嘗て「父」と呼做したる其の人の面影なり。

渠の容貌・風采はかくの如し。然らば其の才藻・學藝はいかに、渠嘗てブルグドルフの公立學校に奉職せんことを望みしことあり。チャールス・モンナードは此の時に於ける渠を評して曰く、

此の時に於ては、ブルグドルフの有司は、一小學校と雖も、之をベスタロッチに委任することを敢へてせざりしなるべし。此の人や、後にこそ世界を動かすほどの大名を

感情
のよひか



(第一回) 貧民學校に於けるラスロツチ

揚げたれ、此の時に於ては極めて庸劣なる教員候補者にだに顔顔することを得ざりしならん。渠は萬事に短所多かりき。其の言語は濁りて不明なり、其の文字は拙劣なり、圖畫を能くせず、文法を知らず、諸學科一も長ずる所あらず。博物學の諸學科をば學びたれども、其の分類法又は名稱などには毫も注意する所なかりき。又通常の計算には熟達したりしかど

乗算又は除算の稍錯綜せる者に至りては大いに苦し
みしなるべく、又幾何問題の如きは、恐らくは曾て解釋を試
みしことだにあらざるべし。

然れども、其の膝下に養はれたる幾多の貧兒をして、呼んで
父といはしめたる者は、豈渠にあらずや。其の事業を共に
せし多數の補助者をして、如何なる事に遭ふとも曾て渠に
離るゝに忍びざらしめたるものも亦渠にあらずや。乃ち
知る、渠は決して平々凡々を以て目すべき人物にあらざる
ことを。況や其の才幹、力量の少且短なるにも拘らず、^{ノイ}
ホフスタンツブルグドルフ、イフェルダン等、到る處に千艱
を凌ぎ、萬難を排し、屢偉大なる効果を奏して、人の耳目を驚

かしたるが如きことあるに於てをや。況や又不朽の眞理
を發見して、教育史上優に一頭地を抽んで、遙かに後世を塵
くが如き概あるに於てをや。是に至りて誰か復、渠を目し
て哲人にあらず、偉人にあらずと斷言するを敢へてし得る
者あらん。

因りて疑ふ、渠をして此の高尙なる地位に進ましめたる所
以のもの、果して何くにか在ると。顧ふに、諸君は固より之
に答ふる所以を知るなるべし。余請ふ、一言以てこれを蔽
はん。曰く、堅硬なること石の如く、玲瓏たること玉の如き
心操、即ち儒家の謂はゆる仁、聖徒の謂はゆる愛、佛氏の謂は
ゆる慈悲心、即ち是のみと。蓋し抑揚あり、頓挫あり、又波瀾

ある渠が畢生の事業は其の根源を此の心操即ち貧民に對する憐愍の一念に發すればなり。渠をして墮落せる小兒と接觸することを厭はざらしめたるものも此の一念なり。渠をして疾病ある小兒と同衾することを辭せざらしめたるものもまた此の一念なり。或は神學家たらしめ、教育家たらしめ、辛酸嘗めざるなく、困苦極めざるなく、以て光澤あり、色彩ある、其の全生涯の歴史を織成さしめたるもの、凡て此の一念の然らしむる所ならずんばあらず。若し夫渠よりして此の一念を奪ひ去らんか、即ち是、渠なきなり。要するに、貧民の不幸を憐む一念こそ、渠が生命なれ、骨髓なれ。其の熱心の如き、其の忍耐の如き、其の愛情の如き、はた其の

忘我の如き、苟も美を極め、善を盡し、以て人を聳動せしむる所以の諸徳は、皆此の根本的一念の時に隨ひ、處に應じて名を變へ、形を異にしたるものに過ぎず。

予は唯薄弱なる一老翁のみ。予が知識には無量の闕點あり、且予が知力は比較的比較的に小なり。唯萬事に於て、予が意志の予が利己心のために支配せられざるは、恐らくは予が唯一の特質ならん。

と。渠が忘我の徳に富みしは、其の生涯の歴史明かにこれを證せり。蓋し渠が一代は殆ど忘我の痕跡なり。其の熱心の如き、其の忍耐の如き、例を擧げ、證を求めなば、將に其の煩に堪へざらんとす。然れども、此等の事實は苟も其の傳

を繙かん者の皆能く知る所吾人復何をか贅せん。抑天下の廣き、人物の多き、目して偉となし大となすべき者何ぞ限あらん。然れども渠の如く熱心に、渠の如く堅忍に、渠の如く慈愛深く、はた渠の如く忘我の徳を備ふる者、天下廣しと雖も、人物多しと雖も、果して幾人かある。渠は容貌、風采の點に於て已に衆に劣れり、才藻學藝の點に於てもまた人の下れり。たゞその人格の偉大なるに至りては、類を絶ち、群を超えて、はるかに一頭地を抽んづるものなり。嗚呼これペスタロッチのペスタロッチたる所以なるか。

(ペスタロッチ)

井上馨

政治家。前大藏大臣。侯爵。

大正五年薨す年七十。

六 伊藤公ヲ誄ブ

井上馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒ニ狙撃セラレ、暴カニ清國吉林省哈爾賓驛ニ薨ズ。嗚呼哀シイカナ。予何ゾ多言スルニ忍ビシ。然リト雖モ、予君ト交ル五十餘年、異體同心、生死苦樂ヲ共ニシ、國歩艱難ノ秋ニ始リ、太平富貴ノ日ニ至リ、終始渝ルコト莫シ。自ラ謂フ、交友ノ誼、今古ニ愧ヅル無シ。下。予遂ニ復一言セズシテ止ム可カラズ。予君ニ長ズルコト六年、君予ノ垂死ヲ哭スルコト二回、予幸ニ君ノ交情看護ニ因ツテ再生スルヲ得タリ。料ラザリキ、今日反ツテ君ノ葬ヲ送ラントハ。嗚呼哀シイカナ。

六 伊藤公ヲ誄ブ

三

文久癸亥
文久三年。

回憶スレバ四十七年前文久癸亥ノ仲夏君予ト偕ニ發憤シ
テ海軍ノ術ヲ學バント欲シ禁ヲ犯シ潜カニ泰西ニ航シ居
ルコト纔ニ半年餘馬關鹿兒島ノ攘夷ヲ聞キ意ヲ決シテ急

筆蹟
鶴軍衝雨出
離宮二竊道臣
民仰德風一覽
祚之隆天祖
勅千秋紹述
即無窮
侯爵伊藤博文

即學之窮
高杉

蹟筆文博藤伊

高杉
晉作勤王家
萩藩士。

ニ還リ首トシテ開國ヲ倡ヘ故國ヲ危難ヨリ脱セシム。内
訖尋イデ起リ予ハ暗夜要撃ニ遭ウテ殆ド死シ君ハ高杉ヲ
助ケテ兵ヲ舉ゲ藩論ヲ回復シ我が一大危機ヲ轉過セリ。

己ニシテ王政復古乃チ徵士ニ舉ゲラレ、版籍奉還ノ際君、木
戸・大久保二公ヲ佐ケテ尤モ力アリ。維新ノ績此ヨリシテ
破竹ノ如シ。進取ノ宏謨ヲ翼賛シ維新ノ大業ヲ成就ス。



伊藤博文

勅ヲ奉ジテ憲法ヲ創定シ長
ク國家ノ本ヲ固クシ其ノ他
法律制度ノ設概ネ君ニ俟タ
ザル莫ク洵ニ組織ノ才ヲ推
ス。四タビ總理大臣トナリ、

勳業ノ盛ヲ極メ首メニ韓國統監トナリテ保護ノ範ヲ立ツ。
君學漢洋ヲ該ネ識東西ニ通ズ。尤モ東洋ノ平和ヲ以テ念
ト爲シ常ニ忠節道義ヲ以テ淬礪シ王臣匪躬ヲ以テ自ラ任

王臣匪躬
王臣蹇々匪二
躬之故易經。

人の周章いふに及ばず、士民百姓等に至るまで、その程々に
従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取
りつきて泣くく、申しけるは、「殿も定めて覚えさせ給ひな
ん、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに験を得し良醫
の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手
を束ね家康亦死を決す。この上醫療其の詮なし。且は命
を惜むに似たり。」とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思召し侮つて、
事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫
して治し參らせんとするをも用ひ給はず、失せたまはんこ
と、御心がらとは言ひながらあつたらしき命かな。諸醫術

自業自得

盡きぬと申す上は、彼争でか治し參らすべき。年老いたる
重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先
へ參らん」とて、御前を罷立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍
ふ人々走り出で引留め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」とい
ふ。重次大いに聲を怒らかして、「最期の暇乞うて罷り申す
者を見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて出でんとす。

「されば候。」ひげいふ その人を止めよとの御使が、えこそ止めぬと申
せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。といはれて、「げにさも候。」
とて御前にまゐる。

徳川殿「汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果て

筆蹟

爲新曆之御賀
預貴翰忝致拜
見候御萬福御
履新之事珍重
令存候拙者事
無恙迎歲仕候
沙而去冬者御
精選之一冊御
芳惠不知所謝
前書に繼々呈
謝之事候定而
其書可達几下
奉存候猶期永
日萬慶可申伸
候恐惶謹言
新井勘解由
君美
正月廿五日
稻若水様
貴報

ぬに、縦ひ家康が命を終るとも、
汝が世に在らんを頼にこそ死
すべけれ。又汝等も如何にも
して一日も世に残りて若き者
ども控して、我が家の絶えざら
んやうを計らんとは思はずし
て詮なき死の供せんとする事
やある」と仰せければ、「いや、
それは人によりての事に候。
重次も今少し年だに若く候は
んには、仰までも候はず、犬死せ

新井白石筆蹟 (簡手家名)

御賀
去年家康の女
督子北條氏直
に嫁す。

ん人の御供其の詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍
に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。
人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに餘つて、世
に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ
當家にては人に畏られれども、敬はれもしつれ。殿の亡くな
らせ給ひなば他人までも候まじ、まづ御賀の北條殿、我が國
國を取らんとし給はん、若き人々が行末久しう仕へんと
頼みきつたる主に、忽ち別れて氣後れし、はかしくしき矢の
一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦
踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつた
るかたはものは、徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人

武田
勝頼

なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん。」と後指さゝれん事、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれ参らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候。」と申す。

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生残つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や。」と仰せけれ

ば、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰をや背くべき。」と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて参つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛覚えさせ給はねば、艾を増加ふること多くして後、聊か痛ませ給ふ由、仰せければ、御薬をつけて参らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜半ばに、御腫物潰れて、膿水血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへは、重次は嬉泣に聲を限に泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。

(藩翰譜十三卷)
慶長五年の事
一万人以上の大軍の事

八 利根川の秋曉

徳富健次郎

息栖 常陸國鹿島郡中島村大字息栖。

北浦

常陸國霞浦の東にある湖。其の水、浪逆浦より利根川に通ず。

小見川

下總國香取郡小見川町。

チエルシー

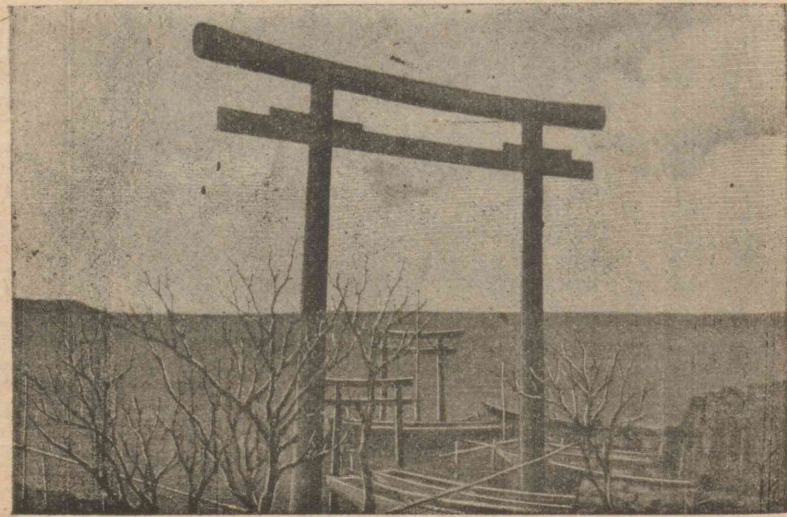
英國倫敦市の近郊。評論家歴史家カーライル (1795-1881) に住みき。

コンコルド

北米合衆國東部の市。評論家、詩人エマソン (1803-1882) に住みき。

先年の秋十一月の初旬ころ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は利根川の本流が北浦の末流と落合ふ處で川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、櫓の音がきいくと枕頭に聞える。翌日黎明に起きた。宿の者はまだ寢て居るので、そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川むかふの小見川の方から、いかに微かな雞の聲が聞えた。大河を隔て、呼びかはす此の雞聲は實によい。チエルシーの賢とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔て、呼び交したのであらう。自分の眼には、曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る様に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやりく、水蒸氣が見えて來た。

ドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔て、呼び交したのであらう。自分の眼には、曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る様に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやりく、水蒸氣が見えて來た。



息 栖 神 社

實に迅い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちて居る。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきらきらとまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れる鳥が一羽、朝日を負うて、さながら曉を告げわたる神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。背後の茅舎から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につ

けて、くわつくくと呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き吹き川に下りて河水を掬んで口を漱ぎ、顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分は思つた。(自然と人生)

詠歌

近松半二

大阪の淨瑠璃作者。

天明三年(一八一三)歿す年十九

普陀落

觀世音菩薩に因ある處といふ。

さみる寺

紀伊國海草郡紀三井寺村金剛寶寺。

西國順禮の札所。

九 順禮唄

近松半二

「普陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひゞく瀧つ瀨。年はやうく(とほ)の道をかへたる笈摺に同行二人。」と記せしは、一人は大悲のかけ頼む「故郷をはるくこゝにきみる寺、花の都も近くなるらん。」順禮に御報謝といふも優

しき國訛。「てもしをらしい順禮衆。どれく報謝進ぜう。」
 と、盆に方々し謹し忠しをしらけの志。「あいく、有難うござります。」といふ物
 越から棲はづれ可愛らしい娘の子。「定めて連衆は親御達
 國はいづく。」と尋ねられ「あい國は阿波の徳島でござります。」
 引、何ぢや徳島。さつてもそれはまあ懐かしい。わしが
 「生れも阿波の徳島。そして父様母様と一緒に順禮さんす
 のか。」いえく、其の父様や母様に逢ひたさ故、それでわし
 一人西國するのでござります。」と聞いて、どうやら氣に懸る。
 お弓は尙も傍に寄り「うう父様や母様に逢ひたさに西國す
 るとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達
 の名は何といふぞいの。」あい、どうしたわけぢや知らぬが、

取らるゝ命
 主君の重寶國
 次の刀の紛失
 せしがもとに
 て。

三つの年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何處へや
 ら往かしやんしたげな。それで、私は祖母様の世話になつ
 て居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい。
 それで、方々尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波
 の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と聞いて、お弓は取
 付き、「これくく、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの
 歳別れて、祖母様に育てられて居た。」とは疑もない吾が娘、と
 見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子。やれ吾が子か、懐
 かしやと、云はんとせしが、いや、待て、しばし。夫婦は今にも
 取らるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはゞ、此の子
 にまでどんな憂き目が懸らうやら。それを思へば、かへつてなまな

かに名乗だてして憂き目を見んより、名のらで此の儘返す
のが、却て此の子の爲ならんと、心を静め、よそくしく「お、
それはまあ、年としはも行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出
さしやつたのう。其の親達が聞いてなら、嘸嬉うれしうて嬉し
うて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬが世の憂き節しづ身にも
命にも代へて、かはい、子を振棄て、國を立退く親御の心、よ
くよくの事であらう程に、むごい親と、必ずく恨まぬがよ
いぞや。「いえ、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事
はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺
えず、餘所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり夜は抱かれ
て寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あの様に

髪結うて貰はうものと羨ましうござんす。どうぞ早う尋
ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲
しうござんす。」と泣いしやくりするいちらしさ。

母は心も消え入る思。「さてもく世の中に、親となり子と
生るゝ程深い縁はなけれども、親が死んだり、子が先立つた
り、思ふやうにならぬが浮世。此方こなたどれほど尋ねても、顔も
處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、
國へ往んだがよいわいの。「いえ、戀しい父様や母様。
たとひいつまでかゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい
事は、一人旅ちやて、何處の宿でも泊めてはくれず。野に
寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲なかれたり、こはい

事や悲しい事。父様や母様と一緒に居たりや、こんな目には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひたい。」と、わつと泣出す娘より、見る母親は堪りかね、「お、道理ぢや、かはいや、いちらしや。」と我を忘れて抱き付き、前後正體なげきしが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打明け、名乗らうか。いや、それでは、此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「お、段々の様子を聞き、吾が身の様に思はれて、悲しいとも、情ないとも、言ふに、言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩でも出りや、わるい。何處を證

據に尋ねうより、其の祖母様の方へ往んで居るとの、追つつけ父様や母様が逢ひにいてちや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直して是からすぐに國へ往んで、随分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と宥め、賺せば、聽きわけて、「あい、忝うござります。お前が其の様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様の様に思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませう程に、まうし、お家様、お前のお側に、いつまでもわたしを置いて下さりませ。」「え、悲しいこと言出して、また泣かすのかい。先にからわしも子の様に思うて、爰に置きたい、往なしとむないと様々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲に

ならぬ事が有るによつて、それでつれなう往なすのちや程に聽分けて往んだがよいぞや」といひつゝ、内へはり箱の底を探して、豆板まめいたのまめなを悦ぶ餞別はなびと、紙に包んで持つて出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める。僅かなれども、志、此の銀なを路銀にして、早う國へ往にや。必ず必ずわづらうてばしたもんな。」と銀を渡せば、押戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたんと持つて居ります。そんなりや、もう參じます。忝うござります。」と泣くく立つを引留め、「それはさうでも、此は私が志」と無理に持たして、塵打拂ひ、「これ、もう往にやるか。名殘が惜しい。別れとむない。これ、今一度顔を」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離

れがたなき憂き思。それと知らねど、誠の血筋。名殘惜しげに振返り、「何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれることぞ。逢はしてたへ、南無大悲の觀音様。「父母のめぐみも深き粉川寺、佛の誓たのもしきかな。」泣くく別れ行く……。」
施者寺
(傾城阿波の鳴門)

渡邊華山

名は登。
三河國田原藩
の志士。
天保十二年三
月二十日卒年四
十九。

一〇 見よや春

渡邊華山

私十二歳の時、日本橋邊を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲うちなげを受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行ごうぎょう成され、私は同じ人間

じ、終に京都に出奔仕候。その後主人惜しき人物に存
ぜられ引戻され候處、是又數年辛苦仕候爲、彼の地にて
病氣に罷成、歸府後間も無く終に相果て申候。右の次



渡邊華山

第故、妹兩人も、一人は
遠方へ遣はし、一人は
貧家へ罷越し、貧死仕
候。これかれを考へ
候へば、至貧至困無策

無術の上に親父大病に相罹り候爲、斯くは兄弟過半非
業同様の病死仕候次第に御座候。これにて當時困難
至極の儀御察し下さるべく候。

山伏
修験

私母近來迄夜中寝ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申す
もの引きかけ候を見及び申さず、破れ疊の上にごろ寝
仕り、冬は火燵にふせり申候。私親父大病故、高料の藥
種藥禮、日食の麵類等に事缺き、疊、建具の外大抵質物に
置盡し、猶親類共にも借盡し候へば、僅か南鐐一片の儀
にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方
へ、母事唯今存生仕居候助右衛門と申す弟を背負ひ、雪
中を冒して罷越し、夜に入り候て歸宅仕候事之あり候。
その節私洗足の湯を沸し候とて衣服をこがし、大いに
叱られ候儀今に覺え罷在候。之に依つて猶又高橋文
平に相談仕候處、とても學問など致し儒者に相成候と

白芝山
白川芝山。
名は景皓。

金陵
金子氏。
江戸の畫人。
文化十四年三
四七七歿す。

初年、二月の三日、
繪師の筆

て、金のとれ候儀は之なく、何よりも貧を救ふ道第一な
りと申すにより、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と申す畫
工へ入門仕候。此の時私十六歳に御座候。
然る處貧人にて附届行届かずとて、僅か二年にて師家
より斷りを受け申候。私も此の時は如何仕るべきか
と泣沈み候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎様の御
家來に付、その旨申したらば憐み申すべしと申すによ
り、弟子と相成候處、金陵殊の外相憐み少々は出來候様
に相成候。さりながら、半紙を調へ候手段之なく候ま
ま、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、日本
橋二丁目遠江屋、麴町天神たこやにて憐を乞ひ、多分に

文晁
谷氏。
江戸の畫人。
天保十二年三
月二日歿す年七
十八。

一齋
佐藤氏。
徳川幕府の儒
官。
安政六年(三
十九)歿す年八
十八。

相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。斯く仕候間に
も學問は仕度存候へども、何分閑暇之なく候へば、冬に
相成候へば朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火にて
讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種々取立てくれ
候文晁が、毎曉起出で畫を認め候咄を承りて、發憤致候
次第に御座候。右畫事少々宛内職と相成、稽古も出來
候様相成候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。
私廿六歳の正月元日、深く感ずる所これあり。
見よや春、大地も亨す地蟲さへ。
と申す句仕候。之に依つて一齋へも申談じ、學問仕度
候へども、何分寸暇なく候へば、夜中にても參り申すべ

きに付、御門制の儀然るべく御取成下され候様依頼候處、一齋よりその趣を書取り、親父へ申遣はされ候趣之あり、即ち親父より村松六郎左衛門殿へ夜御門限の儀に就き願ひ出で候處、六郎左衛門殿より、儒者に無之ては御門制の儀仰出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫け申候。熟存じ候は上にして君に忠下にして親に孝、皆是學問中より出で來り候儀に有之、殊に上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈、以て繪事を専らとして、急にしては親の貧を助け、緩にして天下第一の畫工と相成申すべき一事に思を定め申候。

繪事にて推謀り存候に、第一の心と申すもの立ち申さず候ては物の形整ひ、落なく見事には出來申さず候。又心ばかりやたけに存込候とて、手が心の通り動き申さず候ては、畫成り申さず候。又手ばかり自由に相成候とも、胴體四肢治り申さず候ては、机に向ひ、腹より溢れ候様には出來申さず候。これに依つて總身の中、髪うぶの先、爪の端まで皆畫に相成候様仕事にて候。己に古人も、明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖と申候。身外のものすら此の如し。況して總身のうち猶更に御座候。今の諸侯如何にや。諸侯にして國を治めずして家中百姓に出精致せと令し候とて、服從仕者可有之

哉。又奉行にても奉行だけの事を盡し申さずして百姓に令し候ても猶更承知仕らず候。然らば上よりして下足輕に至る迄治安に志これなくては出来申さざる如く繪事も右之通りと相心得候へども治道の事は如何哉審に辨へ申さず候。左様に御座候へば、畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、随分試み申すべく候。

(華山全集)

芳賀矢一

國文學者。
文學博士。
東京帝國大學
名譽教授。
國學院大學
長。
慶應三年生。

一一 山室と鈴屋

芳賀矢一

松杉椎などで小暗い路を四五町も上つた處に淨土宗の寺

妙樂寺

伊勢國飯南郡
花岡村大字山
室にあり。松
坂町の西南一
里餘。

本居翁

宣長。
享和元年(一八一
二)歿す年七十
二。

平田篤胤

天保十四年(一
八三三)歿す年六
十八。

がある。妙樂寺といつて、本居翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎく、六七町も上ると古い木の鳥居が有つて十數段の石磴の上二三十坪位が平地になつて居る。其の中央の小高い土盛が即ち翁の墓である。上に櫻の樹が一本。「本居宣長宣長の墓奥墓」と題した墓石がある。翁の墓の左手には、平田篤胤大人の
なきがらはいづくの土になりぬとも、

魂はおきなのもとに行かなん。

といふ歌を鐫りつけた圓い石が建てゝある。篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことは無い、而も數多の門弟子の中で獨り翁の傍に侍つて居られるのは、大

ついでに自然形
そなん、せか
連体形

人にとつては嘸かし満足の事であらうと思ふ。此の墓所は彼の妙樂寺の所有地であつたのを翁が懇請して、生前に選定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、住僧に贈られた手紙は今尚同寺に珍藏して居る。

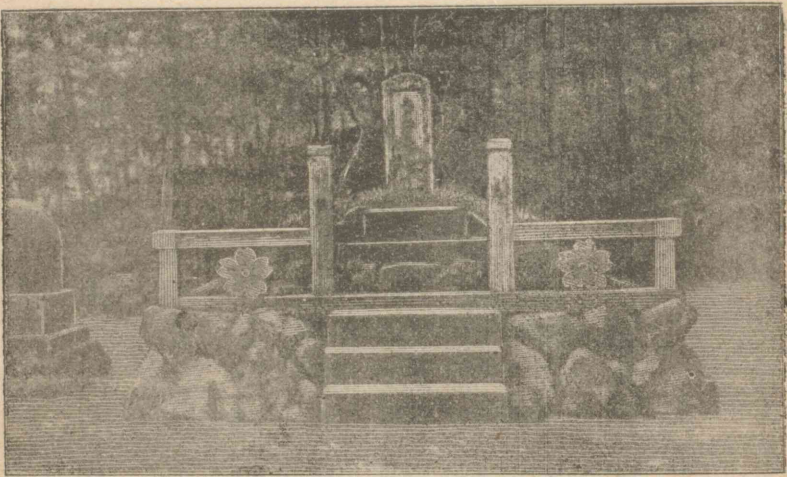
山室山室は自方に千年の春の宿しめて

風風に知られぬ花をこそ見め。

と詠まれたのは此の時である。二十年來一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が今始めて翁の墓前に額づいたのだから、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど、教へ子に

數まへませとをがみ額づく。



本居宣長墓

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つて居るのであらう、其の著書の卓絶な學術上の價值と偉大な感化力とは未來永劫トキトキに歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程大なるものは無い。

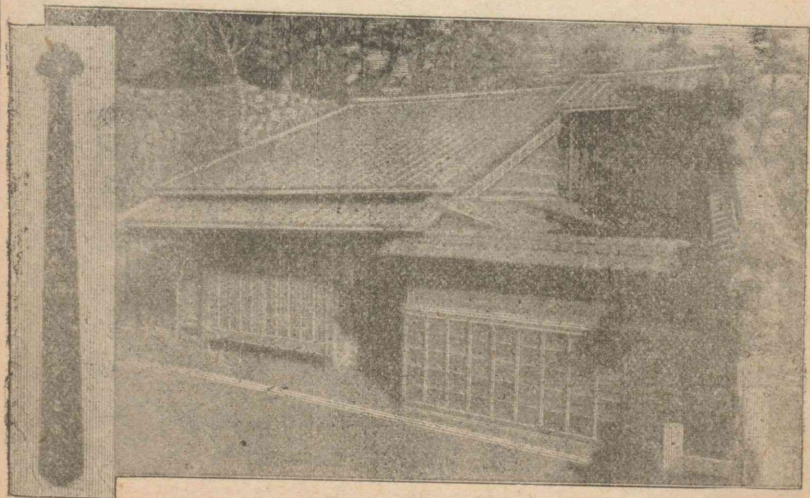
此の墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類が無い。青々とした伊勢の海を

見はるかして、志摩・三河・尾張等の崎々山々、近くは松坂町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見える。」と案内の男は指さした。千古に卓越した學者の奥城として、誠にふさはしい場所である。妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此處の眺望も誠に美しい。元來本居家の檀那寺で翁も折々此處に來られた事がある。今日は住僧が不在で、寺男が一人留守居をして居たが、いざ歸らうとすると、その男も居ない。車夫に聞けば、今在所まで行つて來るといつて出掛けたといふ。さながらに太古の民である。松坂へ歸つて、城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會

があつて、翁の舊宅が其の儘に保存されて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛の品、醫業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學人をして覺えず襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞があるといふので、保存會でこの舊城址の一角へ移したのである。併し庭の樹木置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、臺所の竈も井も便所も本の儘の形に残つて居る。下が引出になつて居る小さい楷子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづゝ六段につながれて懸つて居る。尤もこれは模造品で、本品は陳列庫に

在る。さてもこの書齋こそ翁が一切の著述の製作せられた場所で、此の四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日は、嚙堪へ難かつたらうと思はれて、此の質素な家居の様が愈、翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールでゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも

シルレル
ケルム、テレ



本居宣長舊宅鈴屋及遺愛の鈴

其の偉大な事業と其の質朴な家居の有様との對比を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には一層感を深うした。此の公園は四望豁然、パノラマを見るやうであるが、翁の遺蹟を移して更に崇高の趣を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇である。松坂町民の誇は翁の遺蹟に越したものはあるまい。

山室山神社
本居宣長を祭る。

城の大手門を出て數十歩、縣社山室山神社がある。社殿や瑞籬が神宮風の様式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに此のあたり櫻が幾本ともなく返り咲をして居る。案内人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、流石に本居翁の郷土だけあつて、櫻は一年中

小笠原長生

海軍中將

子爵

慶應三年(一五三)

生

明州

支那浙江省寧波府

望郷の歌

あまのはらふりさげ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。安倍仲麻呂

來て見よかし

談林

名月や來て見よかしの額際。西山家園。いつか屍の戈とりて月見るたびに思ふかないつゝ屍の上に照るやと。森五六郎

咲くのだらう。」と云はれたといふことである。(筆のまに〜)

三 遼東の月

小笠原長生

古來幾多の英雄豪傑は月に對して感慨多かりき。不幸の宰相をして筑紫の謫居に泣かしめしも月にあらずや。渡唐の學者をして明州の祖道席上に望郷の歌を詠ぜしめしも月にあらずや。新羅三郎は之を仰いで足柄山頭に祕曲を奏し、上杉謙信は之を觀て陣中に風流を弄ぶ。「來て見よかし」と叫ぶ武骨の俠者「いつか屍の上に照る」と述懐せる憂國の壯士、皆是感慨の餘ならざるはなし。月や月や、何すれぞしか多恨なる。

十三日
柳樹屯
大和尚山

大和尚山
大連灣の間に
ある島山。

柳樹屯
大連の東、金
州の南、大連
灣に臨める村

渤海灣頭風吹荒び、怒濤舷を敲いて、銃を枕にする兵士の夢破れがちなる師走もいつかたけて、今宵最後の望の夜となりぬ。更けゆくまゝに、風和ぎ水平らかにして、天地唯寂然たり、獨り寒月の高く冴えて大和尚山の頂に懸り、峰に斑の残んの雪を有るか無きかに照すもすさまじく、前方近くに數箇所砲臺屹然と空に聳えながら、是また関として眠るに似たり。右方を顧みれば、柳樹屯の村は煙の如く、肌寒げなる冬木立の間、散點せる賤が伏家に、未だ寝ぬ火影二つ三つあるを見る。土民國家の危急を知らず、何をか爲し何をか語る。蠢爾たる彼等の境涯轉憐むべし。これにひきかへて、我が國民が報公心の殷なることよ。その夫その子

は、召集一令の下に、銃を肩にして立ち、千里の波を蹴て、數度の激戦毎に凱歌を奏し、陣中にありて月の圓なるを見ることこゝに七回。その妻その父母は、家を守り幼兒を育て、費を節し産を傾けて、獻金の後れんことを恐れ、四千萬人の熱血さながら涌きかへらんばかりなり。往くも留まるも、君の御爲國の爲なれば、固より一點の未練なからん。それ然り、然れども熱血の裏面は即ち多涙なり。今宵この明月に對して、豈一點望郷の情なきを得んや。余も亦心頭忽然として、母の涕を浮へ出でぬ。

生きて恥死して恥なる時しあれば、

たゞ心せよものゝふの道

これ旅順の大勝を祝して遙に余にたまひし母の歌なり。一讀再讀して、教訓の意愈深きを覺え、唯わが身の短才愚鈍にして消埃の功なきを嘆ずるのみ。母は余を愛して愛に溺れず、屢書を寄せて常に余を勵ましながらも斯くのたまひき、自愛せよ、軍務に死するは武人の本懐なり。されどもし病に斃るゝか、或は軍半途に送り還さるゝか、さることあらんには、母はいかばかり口惜しからん。と、されば習ひ給はぬ身の跣足に針の如き霜柱踏み碎きて、神に日參し給ひつゝ、皇軍の勝利と余が武運の長久とを祈り給ふこと、六箇月の間一日も懈り給はずと聞く。殊に夜衾を重ねず足袋をもはかず、又侍女に「暑し」「寒し」の二語を禁じ、以て遠く余の

辛苦を分たんとし給ふ。その慈愛何にか譬へん。これに報ゆるは唯猛進の一事あるのみ。

艦橋の欄干に凭りて沈思する折しも、忽ち聞ゆる胡歌の聲、濱邊の一隅より斷續して來る。その節一長一短一高一低、

喃喃として咽ぶが如く、切々として怨むるが如く、悲愴坐ろ

に骨に徹し、艦上の兵士皆頭を低れてこれを聞く。無心の

月は愈冴えて天に中し、十餘の艦影水に落ちて夢よりも淡

し。
(國語教程)

一三 アルプス越 その一

時はこれ西曆紀元前二百十八年、行く春の名残も、惜しき五

ホ
エ
レ
ニ

月の末、將軍ハンニバルの召に應じて集る者は、九萬の歩兵、五十の戦象、重騎、輕騎合せて一萬二千許、總勢十萬に餘つて、根據地なる西班牙の新カルタゴの郊外に雲霞の如く、鑿き渡つた。ハンニバル陣頭に立つて命を下せば、一陣二陣繰りいだし、春の潮の寄するが如き勢である。

エプロ河を打渡り、ピレネー山を踏破り、更に又ローン河の象渡しに幾多の艱難辛苦を嘗めて、十月の半ば、山地に秋闌けて天に木枯の吹きすさぶ時、ハンニバルの軍勢はアルプス山に面して立つた。

仰げば絶頂は雲に隠れて、飛ぶ鳥の影さへ見え、俯せば草木霜に枯れて、千里蕭條の裾野が原。見渡せば、嗚呼見渡せ

エプロ河
西班牙の北部より東南に流れて地中海に入る。
ピレネー山
西・佛の國境をなせる山脈。
ローン河
瑞西より出て佛國の東部を南流して地中海に入る。

ば幾百里、自然が築ける萬里の長城、蜿蜒として南北の世界を限る。

阿修羅
印度神話に戦闘を事とせる
悪神。

鳥も翔らず鹿も渡らぬ此の天險、人馬兵糧幾萬を擁して越えんとするハンニバルは、抑人かはた神か、否、彼こそは羅馬を憎む一念に命を忘れた阿修羅であらう。道に半ばを失つて、總勢今は五萬許、吹きおろすアルプス山の山風に、征旗堂々と押立て、此の天險を登つて行く、その意氣込は天地を呑まんばかりである。或は槍を杖づいて岩角を攀ち或は木の根に縋つて崖を登る。一步登れば一步は更に危く、一崖攀つれば一崖は更に峻しく、山は層一層前途を塞いで、恰も行軍を拒むが如く思はれる。

茲に又一段の困難を持來したのは、山中の野蠻人であつた。彼等は峽谷山隈の各部落から雲の如く集つて來て、軍隊の行く手を塞ぎ、左右の峰から巖を轉がし石を投げて行軍の道を遮り、隙に乗じて軍馬兵糧を掠めて行く。世界の險山を住居とする蠻人は、嶺の小鹿か、梢の猿か、崖を傳ひ巖を攀ち、森を貫き藪を潜つて追へば走り、引けば集る。智謀に長けたハンニバルも、これには殆ど當惑したが、色々手を盡した末に、探り得たのが蠻人どもの習慣である。

彼等の習慣として日のある間は随分山中を活動するが、日が暮れると同時に小屋、洞空の口を閉ちて一步も外へ出かけない。此の事を探り知つたハンニバルは、晝は山陰に屯

して兵を休め、日没に及んで進軍することに定めた。暗澹たるアルプス山の夜道を照すは、木枯に研ぐ星の光、高峰に磨く氷の光、踏む足下の覺束なくて、道はなかく、渉らぬ。兎角する間に朝日は昇る。それを合圖に野蠻人等はまた現れて、山上から轉がし落す大磐石、崖下の軍勢は見る／＼中に千仞の谷底へ



跳落され、切立つた岩石に打碎かれて、谷間の雪忽ちに紅の血潮に染まり、吹來る風は血煙を含んで腥く、反響は人の叫を返して物凄く聞える。

この際思ひも寄らぬ奇功を奏したのは象隊であつた。小山の様な動物が、身體にだぶ／＼の波を打たせて暢氣さうに歩いて來ると、蠻人どもは膽を潰して驚いた。此の驚はやがて恐怖と變つた。すべて不思議なものを見て恐を抱くは無智な者の常である。流石に獍猛な蠻人ども、此の不思議な動物には恐をなして、容易に傍へ寄らなかつたといふ事である。

一四 アルプス越 その二

悪戦苦闘を續けに續けて、險山を踏破する事既に八日、麓に足を入れてから九日目に、全軍は漸く絶頂に達した。歐羅

巴の屋根と云はれるアルプスの絶巔、氣澄み空晴れて、南歐の平野は遠く開け、世界は全く一變したやうな感じがする。ハンニバルは敵國を眼下に睨んで全軍を止め、今や我等は伊太利の城壁を登り盡せり、否實に羅馬の城壁を登り盡せり。是より先は下り道、見よ、彼處の野に到着せば三度とまでは闘はずして羅馬は我が手の中に入らん。將軍の意氣天を衝けば、士卒の意氣も亦天を衝く。アルプス山上カルタゴ全軍の士氣は既に伊太利の平野を呑み、全軍の心は既に羅馬の都門に城下の盟をなさしめたやうに勇み立つた。是より後は下り道、唯一息と思つた道は、前より一層險しくなつた。しかも二三日打續いた寒氣に、山は一面の氷とな

つて硝子を張つたやうな崖路を傳つて行かねばならぬ。過つて一人滑ると、それに押されて次から次へ人なだれを打つてどつと滑る。無慚にも千丈の谷の底へ、數百人の兵士を一時に葬つて了ふ事が度々であつた。殊に、馬などは滑り落ちると、身體の重みで氷の中へ陥つてそのまゝ凍え死ぬのである。八寒地獄の有様も思ひやられて實に悲惨の極みであつた。困難に困難を重ねながら漸くに進んで行くと、茲に又意外の大難が控へてゐた。見れば前面一町ばかり崖が崩れて、行くべき道は塞つてゐる。仰げば峻峰雲に入り、俯せば幽谷奈落に達す。嵐に翔る猛鷲の翼は知らず、地を行く人間

の足を以ては、通過すべき途がない。かゝる際にも物に動ぜぬ將軍は、直に全軍を引止めて、其處に露營の陣を張らせ、翌日より、將軍自ら一隊の兵を指揮して、岩を動かし石を切り、非常な障碍と戦つて、漸く人馬を通ずるだけの細道を開き、先づ飢と疲勞とに弱り果てた一群の馬を麓の牧場へ送つてやつた。

其の後猶三日間工事を續けて、象の通れる様に此の道を廣げた。此の工事のために滞在中途に迷つた象や馬が段々集つて來たので、それを併せて隊を整へ、漸く此の難處をも通り抜けた。

併し困難は此處に盡きたのではなかつた。或時は吹雪に

閉ぢられて道を失ひ、或時は寒風に曝されて指を落し、辛うじて麓に近いアオスの村に着いたのは十月末の事であつた。

アルプスにさしかゝつてから今日まで丁度十五日、新カルタゴを出發してからざつと五箇月、出發當時十一萬の大軍は今數ふれば二萬六千、しかも其の生き残つた者共は、何れも肉落ち骨現れて、恰も餓鬼の如き有様である。餓鬼よ餓鬼、誠にこれこそは羅馬の血に飢ゑたカルタゴの餓鬼、今此の餓鬼が突如として、アルプスの險を踏破り、北伊太利に暴れ出たのである、羅馬の運命もまた危いかな。

内外歴史講壇による

柴田鳩翁

名は謙稱。

京都の心學

者。

天保十年(三)

亡

七。

一五 壺

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役家持の人々、一同に座に就きますると、様々の馳走がある。時に、かの年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下されい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて来る。座中も「これは好いお心附き、ひらにお菓子を召しあがられい。」とすゝめる。年寄もあつはなし、「然

景清
悪七兵衛。
美保谷
十郎。
源平屋島の戦
に景清十郎を
追つて兜の鏝
を捉ふ互に曳
きあひて鏝ち
ぎる。

らば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突込みしな
に少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出
さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜
けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつばつて見ても抜
けず、まご／＼して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされ
ましたぞ。」いや手が少しつまりまして思ふやうに抜けませ
ぬ。「と眞顔になつていはるゝ。「それは氣の毒、私が壺を持
つて居りませう、無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が
向ふへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前
へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鏝曳を
する様など、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかく、笑

司馬溫公

名は光。
宋の政治家、
歴史家。
六十八にて薨
ず温國公を贈
らる。

はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ」といふ。さあ、
これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。接骨ではい
くまいか」と、酒宴の興も醒めはてました。
時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなされな。我
ら承つたことがある。『昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢
の小兒と共に大きな壺のほとりに遊びましたが、一人の
小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこ
れを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃
の石を取つてかの壺へ投附けましたれば、壺は割れてはま
つた小兒は不思議に命を助りました』と或人の話ちや。今
お年寄の御難澁は、この話によう似てある。いざや、我らが

司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮なが
ら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつ
へらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺
を被つた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金
米糖が散らかつて雪を降らした様になると、「やれ、お年寄お
助りなされたか」と其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金
米糖を一杯つかんで居られたと申すことちや。何とをか
しい話ではござりませぬか。
つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたも
のを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地な
うまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのちや。か

やせん

く申せは金錢の事のやうなれど、つかむものはこればかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、力の強いをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかつき歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、慎も出來ず、せん方なさに癩氣シヤクキ抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

(鳩翁道話)

一六 雪前雪後

幸田露伴

幸田露伴
名は成行。
文學者。
文學博士。
慶應三年(一五三
七)生。

雨も好し、露も好し、霰も霽も天より降るものゝ面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は、兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れてちらく、と降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、樅の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく、軽らかに降りて、落つる間もなく、色無き水の昔にかへる、淡々しさもなつかしく、消ゆるくも少し

は積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松梅・樅なごの梢には天華俄に落ちかゝるかど疑はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖か暖かき未だしければさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且輕やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には對岸を虚無に封じて仙境の縹渺たるを欺き、半衢の陋街には連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨たるを疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る

眼もあやに美しき限なり。

すべて降る時の眺には廣きところより狭きところ好し。

玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見え、却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇り無き地の皎々と白きが見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに面白くおもはる。馬をさへ眺むる」と人の

馬をさへ
馬をさへなが
むる雪の巨
な。芭蕉。

云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる外郊のさまながらもよし。

真如堂

京都市の東北にあり。天台宗。

岡崎

真如堂の南、平安神宮の邊。

梅尾・槇尾

共に京都市の西北方にあり。高尾と合せて三尾と稱す紅葉の名所なり。



雪の金閣寺

て千古ひやゝかに峙ち、潭は藍靄を湛へて一脈おもむろに流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、群蓋梢重く、壁の簷を戴け

西の京は金閣銀閣、真如堂、岡崎、東山、清水皆畫とすべし。梅尾、槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の、巖は鬼斧にまかせ

山王臺

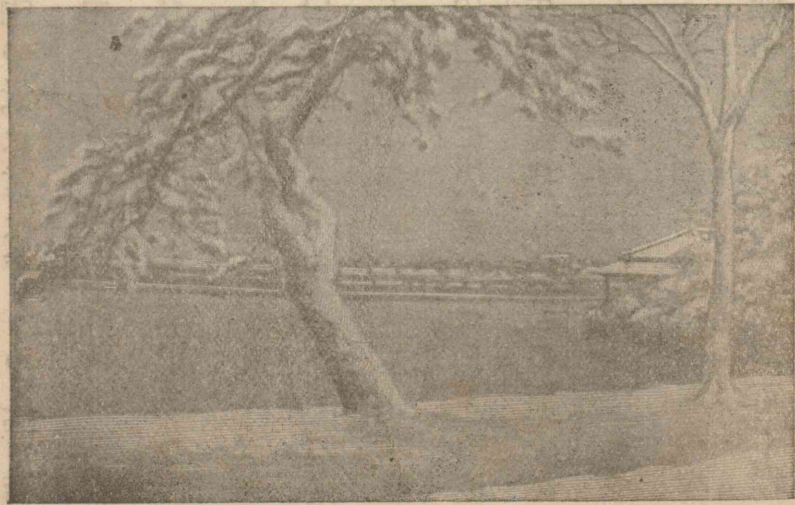
麴町區永田町に在り。日枝神社のある處。

溜池

山王臺の東南麓にありしが今は埋められ宅地となる。

る松の村立のあたり姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなど、二十年の昔の、今の胸に猶あざやかに。

東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪にしづかなる大御代の午、またゝぐひなくめでたし。山王臺今なほ好からんが、溜池のありしむかしいたづらに



雪の不忍池

待乳山

隅田川の右岸
淺草公園に近
き小丘。

相生橋

深川區越中島
より京橋區新
佃島に架した
る橋。

中島

深川區越中島
の一名。

なつかし。 不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ、石橋の
小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に
一撮の白きものを見たる、これも捨てがたき風情あり。 暮
れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめき
を聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとかや云ふべき。 隅田
川は待乳山を望みたるも好し。 山に舞臺あり、臺より望み
たるも好し。 一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流る
る川なりとたゞふべし。 相生橋の橋長く、中島の島小なる
取りいで、云ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすか
して、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立
の鷺を宿したるに割りて一幅の畫としたる、欣ぶ可く、賞す

へく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

明星派

(洗心録)

與謝野晶子

歌人。
明治十一年
生。

一七 白椿

與謝野晶子

春の夜のものかいなかは知らねども、玉のやうなる白
椿かな。

白椿は人間の心にさへも何もの、透視をすることも難事
でないやうな自信を生ぜしめる秋の氣の中にあつてよい
ものかも知れない。 しかし秋にあつても白椿は餘りに冷
い塊であらうから、やはりかうした光と匂を一緒にしたや
うな春の月夜の下へ置くべきであらう。 こんな事を思ひ

ハカほり。
白ふつやふかす
美。
ふかひ、やま

ながらも自分は美しい白椿の木の下を去りかねて居た。
み吉野の櫻咲きけり、帝王の上なきに似る春の花かな。
大和の吉野山の櫻が咲いた。美しさ、氣高き、淨さと總べて
を備へた櫻。神よりも更に尊いものは日本の天子である。
櫻は天子のやうな花である。これ以上の美はない。高華
な春の花を代表するものとして櫻は最もふさはしい。
船の足平砂^サを歩む人に似て、倦めるを思ふ春の日の灘。
平たくなつた入海に向ふを大きい船が横ぎらうとして居
る。もとより動いて居るものには相違なく、何時か眼界を
去るものに違ないが、一時間二時間見て居るだけでは動い
て居るとも見えないのである。變化のない景色を見なが

ら果てもない砂原を行く旅人のうんざりしたやうな足ど
りが此の船によつて思はれた。船もあまりに波のない風
のないことが物足りぬらしいと思はれるのであつた。

大琵琶の湖よりも笹色の苗代田こそひろくと居れ。
大きい琵琶湖に隣つて更に雄大な色の塊がある。それは
東近江に果てもない水田の苗代の色である。

遠方に星の流れし道と見し川のみぎはに出でにける
かな。

まだ遠くの方を歩いて居た時、この月夜の世界の中に一筋
銀を引いたやうに一寸見えたものは、流星の後の色かとも
思つた。自分のそゞろ歩きの足はその川の岸へまで自分

を伴れて来た。遠い景色の美しかったのに恥ぢない、
大河の眺である。

秋の雪頂に積み、山山路のひろ葉ひろがり裾野霜ふる。

十一月の初めの雪がもう隣國から渡つて来て山脈に白い
光つた線を加へて居る。冬であつても枯れることのない
青い廣葉を持つた山の山路は元氣よく他の草の枯れた上
に這ひ廣がつて居る。その裾野にはこのごろの朝に霜が
澤山降つて居るのである。(短歌三百講)

雨森芳洲

名は誠清。

對馬侯の儒

臣。

寶曆五年(一

五)歿す

年八十八。

一八 古今千遍

雨森芳洲

舊歲御状相違し御返書未だ候ふ候うち

新歲の芳翰又々相違し亦々拜見仕候跡
御仕固に御重業成り候由御慰此事に存
奉り候此許相違ふ事秘儀無爲に罷在る所及
昔々御佳作御見せり候上京以後別々
御精進候御事候座候也格別に御上達
成り候様存下奉り珍重之に過さず候御
御多々看多高量多々申候鬼角多く御作候
上手に御成り候候々々々高量の字先づ人々相違
す候々々を申候候々々々相違致すばのり候々々
之なく心を以て心に問ひ我が心々思案する事

繁石衛門
古川氏。
名は方久。
對馬藩の國
老。

を以商量と申す和韻の事仰せ聞けしは候
此許河逗留中一時方活換抄と存じ悪詩も
作り申候と上方迄の恥かしく申座候のばせ
難くは座候それ故和韻をば作り申座候御審
怒下さる候と云ふことつを前し話御座候故
書きつけ御目お懸け候御笑いと云ふ候
去年より繁石衛門杯皆々寄合の歌の會を
致し間々和韻の座参り候事申座候御事
歌を詠み候座申座候御事申座候御事
覺之居候と云ふ歌の遂に百人一首の講釋を以

承りたる事御座候と云ふ候と云ふ候と
明き申座候其正歌詞と云ふ候と云ふ候
古今千遍讀と申す願を心小く申座候最早百
五千遍は昨日迄に讀み申座候今迄の讀り申
致候は二十四の七月に千遍の數満ち申座候
御座候其間に先毫致候か又は闇羅まより句死鬼
御座候申座候御事申座候御事申座候御事
中づ願を満し候心に御座候右千遍讀み申座
き歌を詠み候御事申座候御事申座候御事
わきふのけ置と云ふ別に御座候と云ふ候と云ふ

き事に御座候得し私最早世間に望まざる者なり之
 なく候るは死を待た候し一奇事と
 存じ立ち候事に御座候此段書きつけ御目に懸け
 候し老人など存候事に御座候故皆様より
 御年少小御座候より尚ほ候に
 候し候る様申上度此の如くに御座候因之の面
 へ御座候方節は御座候成し候る候
 奉り候申度事小御座候より老筆堪へ難く
 早貴答に及び候餘は後音を期し候恐謹言

(新撰書簡集)

石川依平

遠江の歌人。

安政六年(五)

九 歿す年六十

くもりもは

てぬ

てもはてぬ

春の夜の朧月

夜にしくもの

ぞなき。大江

千里。

まだしき

五月來は鳴き

もふりなん時

鳥まだしきほ

どの聲を聞か

ばや。讀人不

知。

梅 一九 四季の月

梅咲く園に霞みつゝ、曇りも果てぬ朧夜の

峰の櫻の花ぐもり、月こそ春の光なれ。

まだしきほどの時鳥、馴れて涼しき月影に、

はつね待つ夜の枕より、閨の戸さゝで明すなり。

桐の葉わけにかげ見えて、立待ち、居待ち、待ちとりて、

秋とほのめく夕べより、幾夜か月をながめけん。

木葉ふりしく山の端の 時雨にくもり霜に冴え、
雪に照りそふ月影を などをすさまじと思ふべき。

(今葉歌集)

川上眉山
名は亮。
小説家。
明治四十二年
歿年四十。
四日
明治三十一年
一月四日。

川上眉山

名は亮。
小説家。
明治四十二年
歿年四十。
四日
明治三十一年
一月四日。

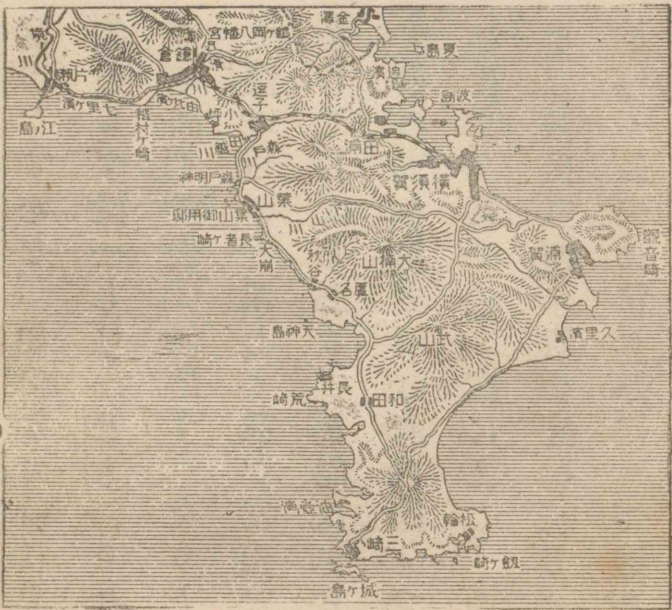
森戸の川

相模國三浦郡
葉山村を流る
る小川。

二〇三 三浦路

川上眉山

四日早起、昨夜起草したる稿を繼ぐこと少時、別に私書二通を認めて日高く宿を出づ。松風は靜かに醉を吹きて浪いと優しげに磯を打つ。空は晴れたり、見渡す島山は打霞み、雲雀は高く上に鳴き連れてさながら春の心地す。道は更によし。一帯の沿岸風色すべて佳なり。森戸の川を渡るに、一岬松深く、風情やさしき處こゝに、明神



三浦附近地圖

の祠あり。千貫松とやらん昔ありしと聞けど今は見えず。岩礁漸く繁し。既にし

て一岬高く出でたる長者が崎の上に出づ。風色更に佳なり。由比が濱稻村が崎七里が濱の波は玉を延べて江の島は實に盆石を浮べたり。長井の荒崎は南に長く、天神が島は近く、三浦が

大島
一、伊豆七島の

豆の山脈は蜿蜒として、はるかに雲煙の間に出没す。我が富士なるかな。如何なる時にも處にも秀いよく、秀に従容迫らず、麗はしけれども侮られず、しづかに扶桑の美を收めて高く雲表に傑出す。をりしも淡靄かすかに裾を罩めて、空の匂いと深し。我が富士なるかなと獨り斷崖の上に立ちてしばし去ること能はざりき。大崩の下を過ぎ、浪打際を縫ひて處定めず行く。十歩一景を生ず。風光到る處によし。既にして暫く田畦の間に入る。僧侶三四年賀の配物持たせて各戸を廻るに遇ふ。前を行く農夫に語りひ寄りて道を共にするも、いとをかし。苦打つ竹を擔げて行くもの、魚籠肩に急ぎ來るもの、まだ正

月の遊びありくもの、背負梯子を背後に焚木を積み重ねて熊手さしかけて歸るもの。處を問へば此處を蘆名とかや。連の男我が爲に遠廻りして導きて又渚に出づ。鹿島といふは此處らあたりなるべし。白沙前に走り、青松後を遶りていと麗らかなる入江なり。海は風ぎて鏡の如し。見渡す方は皆打煙りぬ。投網を手にしたる男三人海中に立ちて鱒の寄り來るを窺ふ。一群の士女紅紫を交へて渚に立たり。眞砂を踏んで屈曲したる濱邊をなほ行くこと少時。僅なる鹽田を見る。鹽焼く煙もあらばと思へど、竈は閉したればにや煙は見えず。空は霞み渡りて浪いよく、優なり。

のどかに打語ひつゝ、徐歩して長井の村に入る。連の男の酒を好むといふに、飲ませんと思ふ興深く、強ひて酒亭に案内せさす。土藏づくりの中二階に通されて窓を開くに、海其處もとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり手に手に標繩を持ちて地を叩きつゝいふ、出さいな、出さいな、出ないものはがにくぞうと。相追うて去る。

酔うて長井を出てたるをいつとも覺えず、端山繁山深くはなけれど、樹の間がくれの茅が軒端に竈の煙の立ちのぼれる方を、むかし和田義盛が生れし處ぞと聞きて、丸三つ引の旗風にこゝらわたりの野をも山をも打靡かせたる三浦の一黨が鎧爽やかなりし當時を思ふに、村老既に記せず、行人

和田義盛

源頼朝の功臣。三浦氏の一族。和田は今、長井村の大字なり。

更に顧みもせて、行過ぐる山田の畔に鳴一羽ちよろしく、駈けありく風情またあはれなり。古人こゝにあり、吾今こゝにあり。烏兔匆々七百年。縦令其の人々は立つて乾坤の上挺んづべき大人物ならざりしにせよ、今將こゝに來る、多少の感慨なき事を得んや。傍への孤つ松に近寄れば、鴨驚きて飛ぶ。四面寂たり。行脚の僧一人遠く山越しに行くを見る、佗しかりき。

既にして行くく、又海を見る。日は早く暮れんとす。堤防長く練絹の如き波を限れる水の江の際に出づ。島あり、波島といふ。右に荒崎を望み左に黒崎を指す。夕日を洗ふ沖の白波、一簇しげき磯松の水に躍つて空に飛へる、墨色

ただ秀でたり。舟もなし、鳥もなし、臘脂を流す雲と波とそれも暫し、日は西に名残の色をとどめて忽ちにして水のあなたに入る。

草臥れて

草臥れて宿るころや藤の花。芭蕉。

草臥れて宿かる頃や花の香を探るべき時にも處にもあらねば、道端に蘿蔔積みかけて、明日は房州におくらんと立働ける男に問うて、外に宿なければ止むなくいふせき家に泊る。主人は三崎に魚を求めて未だ歸り来らず、飯待つほどに名ばかりの庭に出づれば、暮煙近く島根を裏みて、水の色心ゆくばかり美しきに、「家に舟ありや」と聞けば、「あり」といふ名を何とか言ひけん家の子を呼びて舟装ひせさす。櫓拍子靜かに聽て漕出づる波の上の心またなべてならず。煙

清見瀉
駿河國原郡
興津町の海邊。

波縹渺として近きは黒く、遠きは白く、漁村の燈火二つ三つ松の樹の間にきらめけるあたり、炊煙一朵の雲を吐きて稍見え初むる星屑のそれも亦よし。舟は搖々して浪を分けて行く。思ひぞ出づる、癸巳の歳、日々清見瀉に舟を浮べて山と水と月とに明くるを忘れたる事もありけるが、歲月流るゝが如し、我に馴れ睦びたる彼の酒好む老漁夫如何になりつらん、今も猶我が興へたる盃を銜み居るにや、はた死にけるにや。東西幾十里、此の星同じく其の家をも照せどもと思へど甲斐なし。人の心の嬉しさよ、其の歳七月、我都に歸らんとするを送りて、涙を含んで興津の停車場に立ちける時、目をしばたゝきて、「旦那様命があつたらまた御目にか

かりませうぞ。私は取る年ぢや。これが永いお別になる
かも知んねえ。」と岩の如き身を泣崩しけるあはれさに押し
て再會を約しけるが、汽車既に發するに、彼なほ去らず、走り
來りて、「旦那様よ、まめで御座れよう。」其の聲猶あるが如し。
櫓聲俄に聞くに堪へず、急に船を漕戻させて宿に歸る。老
漁夫なほ念頭を去らず。酒を飲んで愁を消するに愁更に
長し。あゝ彼、一介の愴夫ながら、深き所縁もなき我を動か
すこと斯の如し。一片の衷情菩薩の如きものあつて存せ
しなり。原頭人日々に墳墓を築く、知らず彼なほ健やかな
りや。去年沼津に赴きける時は事多くして行くを果さず。
此の度こそは彼が家を叩きて、笑ふ時は赤兒の如く、奮ふ時

は野牛の如き彼に再び遇はゞやと盃を捨て、眠る。夢は
我を彼の浦に載せざりき (眉山美文集)

二一 忘れ難き日

姉崎嘲風

姉崎嘲風
名は正治。
宗教學者。
文學博士。
東京帝國大學
教授。
明治五年生。
友
高山樗牛。
五年の昔
明治三十三年。

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗か
に南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは
恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船
上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄
に消え失せぬ。健在なれ。再び早く相見ん。との別れの言葉
は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せ
ば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、武相の山河、已

に霞の中に入りこにき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方、足柄を過ぎて清見瀉のほとりにさすらひ來り、こゝに別後の愁愁を銷消せんとせしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然、惆悵して無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方、函嶺を踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶悶を遣りたりき。其の夜、月明かに星稀に、一灣の風光恍恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢さいほうのはかなきを歎なげきぬ。

欄ラン

泡ウツク

有渡の山

静岡縣安倍郡

久能山の別稱

袖師の松原

三保の松原の

一部

埋骨の地

静岡縣安倍郡

不二見村龍華

寺

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫うたかたに似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影かすかにして、袖師の松原雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂しょうこんの種こゝろたりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は己に歸り來つれど、彼が姿は今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今は五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我、此の流轉の世にあり、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。

されど人に百歳の齡なく、世に別離の愁を知らざる人はあ
らじ。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みを深か
らしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友此
處にあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして
我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭雨しめやかにして夜
靜かなり。形は見えねど彼は我と語り、我は彼に接し、松風
濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君
と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇
已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴
はん。
人里には燈火已に影を收めぬ。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡

山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と
相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

二三 友に寄す

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎。
文藝批評家。
文學博士。
明治三十五年
歿す、年三十
四。
この文は明治
二十九年一月
六日熱海の客
舎より學友藤
井健治郎に寄
せたるもの。

如何御暮しあそびもや此方お交らす
碁石 碁石の間餘事なう御安心下さ
ねたふ此頃も事に終れは無沙汰
打過ぎぬ毎度勝手の手のみ御頼
申上げは面倒客入候徒然の折に
は

魚見崎
熱海町の南端
なる岬。
真鶴崎
相模國足柄下
郡にある岬。
熱海の北方三
里。

物ほきまゝ色々誼文中よもども實
際手にとらは禊衣の座の水彩畫を
描きみんそ先頃繪具など取寄さ
しども是も亦手に觸まざる願ふ我な
らば空しくも暮らさるるを思ふ
申候

ハイネ
獨逸の詩人。
(1797-1856)

に草葉の朝日影をい入る頃よ起き出で
九時頃より演劇など散歩致し午後は
圍碁大ら草に費すが毎これ例より時ふ
き一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
に仰臥し大海の浩蕩を對して朗吟する
ことも亦座の或は日暮の空ひとり磯の
松に腰おたむしむる夢もなき現もなき思
に耽ることもこれあり休げよや自然の無盡
藏なり今は大教場からさうりには座を

我も人そ自然^しくこと口くも言^はず人
 か其の真意を會得^またらぬ天の郷地の
 響思ひ見^るたは高く深く候^へもそれ感
 ずる人の心は如何ばかり高く深きを其の候
 べきやうく夕日影も名残なく暮^れ果^つる
 渙火ほの見ゆる頃も相成候^ばぞんごくの
 波音のみ高く相成り水と空と別も消え
 天地を一つに思^はふらんと思はる^るころ夜
 の眠のたまたま造ら^るるものにあらずとの

已別

詩人^の言葉の今更^も思ひ出でられ候
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外
 めづたくあかす夜をみ^て打眺^め申候
 元日の夜より十七夜なりしゆ五月の海を出
 づり頂^の宿に世川^の婿崎大橋^の熊谷の
 諸氏と共^に觀^見月の不宴を張り申候^ひま
 一昨^の夜の夜九時頃^も候^ひかん^寝たり
 就^らんと^すは^らす^の窓の間より海邊^をな
 がめれば^は缺^け月^ながら一間^の海と雜^ま言

あはれなりけりかゝるめづるなきに原色よめていひ
 おぼ下女に命じて 雨戸をあきかせ 欄干
 ようて たいそを 朗吟致す 其時の心地よき
 あはれわれにのみまう 石りも 念にそなれかしと
 思ふれいひまき
 貴兄尋ねさるか 日々御勉学の事事
 らんと 羨まき 申す時より 御文賜ひいへ
 りし 病氣も 大方 宜しく 伺御心配下
 さるまじく 候申上げたまき 事山くさまき

ありいひいひをまづいれよと筆をとめ候

(樽牛全集)

二三 空中戦 その一 菊池寛

菊池寛
 小説家
 戯曲家
 明治二十二年
 生

到頭春になつた。佛蘭西風の古城の庭園には薔薇の花が
 咲いて、鶯が鳴き出した。森からは啄木鳥の聲が聞え出し
 た。野には一面に罌粟が眞赤な花を着けた。それが塹壕
 のつい近くまで咲續いてゐる。麥の脊が緑にぐんぐんと
 伸びて行つた。
 陰惨な冬の塹壕生活の痛苦をしみぐくと嘗めながら春の

來るのを待ちわびてゐた兵士たちは、一旦春が來たとなると、どんなに塹壕の中から廣濶な地面に出たがつた事だらう。たとひ塹壕を一步踏出すと、其處には彈丸の流れが必然の死を意味してゐたにしろ、彼等は兎も角塹壕を出て、思ふさま新鮮な空気を吸ひたかつた。冬の間じめじめした生活に虐げられ腐らされてゐた彼等の生命は、跳躍と自由とを望んで、むづ／＼してゐた。塹壕を離れることが許されるなら、鐵火の中へでも突進しようと思ふのは、將校といはず兵卒といはず一同に共通した希望であつた。かうした將卒の心持は攻撃を敢行するには絶好な機會であつた。英軍の總司令部では靜かに總攻撃の策を運らし

てゐた。

いつれの場合にも戦機は先づ飛行機の活躍から始つた。薄緑に晴れた大空の遙か彼方に、瑞西境の高山の影琢されたやうな鮮かな山影が見え出した頃から、彼我の飛行機の活躍は日毎に烈しくなつた。

が、英軍の飛行機は、ともすれば獨のフォッカーに惱まされた。フォッカーは一和蘭人に發明された新しいタイプの飛行機である。彼が獨軍の戦闘機としてその無氣味な姿を戦線に現したのは、今年の初めからであつた。彼は常に八千呎以上の高空を遊弋してゐた。そして鷺鳥が地上の獲物を狙ふやうに、遙かの低空を飛行する英機の姿を物色

ソム
佛國の東北部
に在る河の
名。

した。敵の姿が目に入ると、彼は一揺り揺つて機首を逆さまにするや否や敵機を目がけて眞一文字に落下するのであつた。彼の機體は急速の落下に適當するやうに作られてゐた。しかも急下しながら拳下りに切つて放す機關銃の亂射の正確さは、英佛軍の飛行機に取つて大なる脅威であつた。殊に彼を操縦してソムの空中を縦横に活躍する獨のインメルマン大尉の驍名は英軍飛行家をして始ど顔色なからしめた。

獨逸の公報は續けざまに「インメルマン大尉はその幾番目の敵機を打落せり」と報告した。そしてその幾番目といふ數が日毎に増していつた。

「インメルマンを斃す」といふ言葉はもう三月の初めから英軍飛行隊の宿題であつた。それが五月の初めが來ても解けずに残つてゐた。インメルマンが高空からの逆落しの急襲を避け兼ねて射落された英機の數は無慮五十を超えらるやうになつた。

戦線の後方二哩にある英軍の飛行將校たちは、インメルマンの名を幾度腹立たしげに發音したか分らなかつた。

「今日はインメルマンの死骸に花輪を投げてやらう」と云ひながら罌粟の花を摘んで、小さい花輪を用意して出發した英軍の飛行家は、幾人となくあつたが、しかし一人として歸つて來るものはなかつた。

インメルマンは敵機の墜落を見すますと、大きな波形を描いて地面近くの低空を飛んで敵手の死を弔つた。そして極つて喪章の着いた小さい花輪を投ずるのであつた。「インメルマンの死骸に花輪を投ずる。」それは英軍の飛行家にとつて、どれほど晴がましい事であるか分らなかつた。

二四 空中戦 その二

菊池 寛

第二根據地所屬のマツカビン少尉は、つい今年の二月に佛のヴォザン飛行學校を卒業したばかりの青年將校であつた。普通ならばまだ戦線に送られるほどの熟練を持つてゐなかつたのだが、飛行家の頻々たる戦死は此の未熟な青

年將校を戰場へ送ることになつたのであつた。

彼は戦闘飛行に就いては、まだ何等の自信をも持つてゐなかつた。併し沈着で、そして果敢な彼の天性は、彼の未熟の幾何かを補つてゐたのであつた。

六月一日にソム河一帯に於ける英軍の大攻勢が始つた、それと同時に、飛行隊の活躍も一段の目覺しさを加へた。

八日の朝マツカビン少尉は、攻撃的遊弋に参加することを命ぜられた。敵陣地の上空を飛翔しながら爆弾を投下すると共に、出會する敵機と渡り合ふのが任務であつた。

未明から續いてゐた敵味方の砲聲が暫くとだえた。サヴェジ中尉の機を先頭に、味方の四機は相繼いで上昇した。

マツカビン少尉は殿であつた。

まだ二分間も飛翔せぬ内に、彼等は左の上空遙かに十隻を下らぬ敵機の一隊を見た。敵味方の隻数には大なる相違があつた。が、サヴェジ中尉を始め四人の飛行家は、手痛き一撃を敵に試むべき好機の到来を喜んだ。彼等は何等の打合せもせず、而も一齊に敵機の集團へと突入した。敵はローランド型と、フォッカー型とも一つの型との混成隊であつた。

先頭に立つたサヴェジ中尉は見る間に間近い一隻に突撃した。その機は倉皇として機首を廻らし、一目散に遁げてしまつた。巧みに敵にかはされた中尉は直ちに一隻のフ

ォッカーを指して翔け下つた。烈しい射撃は交換された。敵味方の兩機は各、上空へ出ようとして、烈しい操縦戦を試みた。フォッカーはくるりと急轉したかと思ふ間もなく、忽ち舞ひながら地上に墜落した。咄嗟にけたまひい推進機の音を立てながら、ローランドの一隻がサヴェジ中尉を攻撃した。烈しい而も短い格闘が起つた。ローランドは忽ち安定を失つて、先に墜落した僚友を追つて地上へ急いだ。

折柄、第二番目の英機は他の一隻のローランドと砲火を交へてゐた。そこにもお定りの操縦戦があつた。一尺でも、一寸でも、上空の位置を占めようとあせり合つた。機關銃

が間斷なく銃彈の焰を吐きあつた。此のローランドも亦機體が怪しく搖れたかと思ふ一刹那、忽ち右翼を下にして木の葉の如く空中を滑り落ちた。

此の一騎打の眞最中、味方の危急を看て取つた一隻のフォッカーは空中に呻りを立てながら急いで加勢に來た。二隻は餘りに急いだ爲、あはや互に衝突しようとした。これがために操縦に時を費し、あはれにもローランドを見殺しにしてしまつた。

殿にゐたマツカビン少尉は此等の格闘の間に合はなかつた。「フォッカーに備へる爲に成るべく上空を飛べ」といふ教訓に餘りに忠實であつた彼は、八千呎の高度を保ちながら、味方と敵との烈しい戦を遙かの低空に見てゐた。そして自分も戦鬪の渦中に翔け入らうとして機首を下げようとした時に、彼は端なくも前方三千呎の上空に三隻のフォッカーが翼を連ねて飛翔しながら、サヴェジ中尉を狙つて今しも一文字に翔けおりようとしてゐるのに氣がついた。「サヴェジ中尉も既にその危険を悟つたらしく、急角度を以て大きい圓を描きながら上昇に努めてゐた。折柄先頭のフォッカーが近づいたので、中尉は忽ち烈しい猛襲を之に加へた。敵機は見る間に機首を下にしてくるく」と廻轉しながら落下した。中尉は間もなく、更に他の二機に猛襲された。これを避け

ようとして、突然地上三千呎の低空まで急激な下降を試みた。二隻のフォッカーはそれに續いた。さながら氣球から投下された石のやうに、眞直に而も確實な急降を以てそれに續いた。

マツカビン少尉はどうかしてサヴェジ中尉の危急を救ひたいと思つた。が、戦鬪區域に入るには二千呎に近い垂直の降下を試みねばならなかつた。彼は到底間に合ふまいと思ひながらも、機首を逆さまにして、驀地に降下した。二隻のフォッカーの機上にある機關銃は、烈しい銃火を間斷なく吐いた。中にも先頭に立つてゐるフォッカーは、中尉の機の頭上を掠めつゝ、中尉目がけて、ニッケル製の小さ

い投槍を幾十本となく投附けた。その一本は正しく中尉に命中した。かくて中尉は全然操縦の能力を失ひ、機は怪しく揺れつゝ、機首を逆さまにして地上に急いだ。

後でわかつた事だが、サヴェジ中尉を斃したフォッカーの操縦者は驍名西部戦線を壓してゐたインメルマン大尉であつた。彼は今日も亦垂直に落下しながら機關銃の銃弾を以て敵機を縫ふといふ放れ業をやつたのであつた。が、流石のインメルマンも敵を斃した嬉しさに氣を取られて、他の敵機が間近く自分の背後に迫つてゐた事に全く氣が附かなかつた。

マツカビン少尉はサヴェジ中尉を斃したフォッカーの背

後に迫つてゐた。彼はフォッカーの機關銃は前方の敵を打つやうに固定されてゐる爲に、背後の敵を射撃しようとするには機體そのものを廻轉させなければならぬといふ缺陷があることを心得てゐた。彼はフォッカーの此の缺陷を唯一の頼りとして烈しく敵機に迫つたのであつた。

二五 空中戦 その三

菊池 寛

歐洲大戦の空中戦史に於て最も記念すべき時が刻々に迫つて來た。兩機はもう二百呎とは隔てゝゐなかつた。マッカビン少尉の機に同乗してゐる偵察將校は突如として機關銃の火蓋を切つた。インメルマンは明かに狼狽した。

彼は左に急廻轉を試みた。マッカビンも直ちに同じ方向に廻轉して再び敵機の背後に出た。インメルマンは機首を敵機に向けようとして幾度も狂的の圓舞を試みた。が、マッカビンはその度に巧妙な操縦によつて敵機の背後に出た。最初の不利な位置がインメルマンに飽くまでも祟つた。

英機の機關銃弾は絶間なく空中の英雄を見舞つた。それは三十秒にも足らぬ短い格闘であつた。インメルマンは最後の手段として急激な廻轉を試みた。その途端に一弾が彼の身體の急所を貫いたと見え機は忽ち安定を失つて二三回横轉し石塊の如く垂直に地上に墜落するや否や、青

い焔を吐いて燃え上つた。
マツカビンは初陣の功名に揚々として低空を一周した。
其處は味方の陣地内であつた。落下した敵機の周圍には
味方の兵士が蟻の如く集つてゐるのが見えた。忽ち地上
から大きな喝采が湧きあがつた。兵士は悉く彼を見上げ
ながら手巾を打振つてゐる。彼は二回ばかり喝采に答へ
て波狀飛行を試みた末、根據地にと急いだ。彼は何故に自
分が地上の兵士達からこれほどまで喝采を受けるのであ
らうかと疑つた。インメルマンを斃したなどゝは彼の夢
にも思ひ及ばぬことであつた。
彼が根據地に近づくと、戦線からの電話で彼の大なる勳功

を知悉してゐた同僚の飛行家たちは、悉く營舎の中から駈
けつけて來た。眞先に立つてゐた司令官の少將は、彼が着
陸するや否や、直ちに走りよつて強い握手を彼に與へた。
そして、

「おめでたう、ゾムの英雄マツカビン少尉よ。」

と云つた。マツカビンには何の事か分らない従つて答へ
るすべもなかつた。すると、司令官の傍にゐた副官は、

「君は到頭あの男をやつつけたのだ。なに、あの男と云へ
ばインメルマンにきまつてゐるではないか。」

と云ひながらマツカビンの肩を叩いた。

同僚の飛行家たちは悉く彼を取巻いて喝采した。皆は恐

しく昂奮してゐた。彼は手の痛くなるまで彼等から握手を強ひられた。そして自分の成し遂げた思ひがけなき奇蹟に茫然となつてゐた。

インメルマンの死。それは英軍の飛行隊に取つて何といふ大きな福音であつた。今までフォッカーの無氣味な機體から受けてゐた壓迫が今日こそは晴々と取除かれたやうに思つた。それは飛行將校の何人に取つても、大きな歡びに相違なかつた。

一人が國歌を口ずさみ始めると、皆は一齊に之に和した。彼等は手を舉げ足を踏み鳴らしながら、そこに大なる歡喜の渦卷を作つてゐた。

誰もその親友の一人二人をインメルマンの爲に失はしめられたといふ苦い恨を持つてゐた。そのインメルマンが當然な讐を酬いられたといふ満足と、インメルマンがもう此の世に存在しなくなつた爲、逆落しの猛襲から絶対に免れることが出来るといふ安心とが、彼等の歡びを二重のものにした。

國歌が一しきり歌ひ終られると、彼はマルセイユを歌ひ始めた。無邪氣な青年飛行家たちは有頂天になつて躍り狂つてゐた。

折柄、一臺の自動車が軍司令部の所在地なるアルトアの方面から全速力を以て駆けつけて來た。そしてその自動車

から現れた副官のマークをつけた青年將校は、一葉の紙片を飛行隊長に交付した。

飛行隊長はそれを受取つて微笑を含みながら一讀した。そして直ちに其處に在合せの踏臺に上つて、

「諸君、只今軍司令官からの祝辭が到着しました。と叫んだ。耳を劈くやうな拍手がそれに應へた。

「本官はマツカビン少尉の赫々たる武勳に對して絶大な感謝を表明す。本官はマツカビン少尉に對して直ちにヴィクトリヤ十字勳章を授與あるべきやう奏請しおけり。本官は尙インメルマン大尉の遺骸に對して、貴隊が同大尉の武名と紳士的態度とに對する敬意を表せん

がため軍葬の禮を執られんことを希望す。」

讀み終へた飛行隊長の面には明かに或感激が漂うてゐた。周圍は急に靜かになつた。今までの狂喜は忽ちその聲を潜めた。

彼等は餘りに勝利の歡びに浸り過ぎてゐた。恐るべき敵としてのインメルマンのみを考へ過ぎてゐた。彼等は軍司令官の此の武士的な寛活な提議を聽いて、強い敵愾心の變形としての歡喜が急に褪めかゝつて行くのを感じた。彼等は今名飛行家としてのインメルマン、敵ながら天晴の勇士としてのインメルマンを考へ始めた。すると勇士の死に對する悲壯な心持、名飛行家の死を惜む人間本然の敬

度な心持、さうしたものが皆の心に段々にじみ出るのであつた。

その上敵の勇士の死を弔ふといふ事が、人間としてどんなに美しい事であるかといふことを彼等は考へ附いた。獨軍が隨一の名飛行家として誇つてゐた彼を物の見事に斃して、而も禮を厚うしてその遺骸を葬ることが、どんなに武士道的であり、且紳士的であらうかと皆は考へた。

彼等は急に嚴肅な心持になつた、センチメンタルな、而もへロイックな心持になつた。

流石は軍司令官だ。何といふ武士的な、人道的な考だらう。さうだ、本當だ。あの男は死んでしまつたのだから、

もう決して我々の敵ではない。祖國の爲に生命を捧げた勇敢なる一箇の軍人である。彼の死は彼と我々との敵對關係を永久に消滅せしめてゐるのだ。我々は彼に軍人として勇士として十分な敬意を表せねばならない。さうだ。有志の諸君は彼の遺骸を收容するため直ちに出發してくれたまへ。

飛行隊長の言葉は感激に充ちたハラーと拍手とによつて迎へられた。二臺の自動車は忽ち用意された。その中の一つには、敵の勇士のために、白木の柩が載せられて居た。インメルマンの遺骸の收められた柩は、間もなく彼が戰死した場所から自動車に運ばれて飛行隊に到着した。柩の

上には野生の草花で作つた花輪が幾つもく、飾られてあつた。

柩は教會堂前の廣場に設けた祭壇に安置された。式は簡單で嚴肅であつた。老牧師は敬虔な聲を振り絞つて莊重な祈禱を捧げた。飛行隊の人々は任務に就いてゐるもの外は悉く參列した。彼等は各敬虔な心持で此の勇士の死を弔つた。ソムの戦線を縦横に荒しまはつた敵は今や全然戰鬥力を失つた遺骸として彼等の前に痛ましく置かれてゐる。もうフォッカーもない、機關銃の脅威もない、だ勇士の死といふ嚴肅な事實があるだけである。

軍樂隊は莊嚴な悲みの曲を吹奏し始めた。二三の士官は

その曲に合して歌詞を口ずさんだ。それが段々聲高く擴つていつた。彼等の心の裡の感情が此の曲にびつたりと合つた爲であらう。

夕日はフランドルの丘陵の彼方に眞紅の色を漂はしながら落ちかゝつてゐる。戦線の砲聲は何時の間にか言ひあはせたやうにとだえてしまつた。列席の將士の悲壯な心を搔きみだすものは、もう何もなかつた。彼等は總べての怨恨を忘れ總べての敵愾心を地に擲ち、敵の勇士のために嚴肅な軍葬を施行した。それは人間が相害ひ合ふ戦争の中に於てもつとも輝いた美しい瞬間に相違なかつた。

人類愛

(心の王國)

二六 表忠塔

一面に小松を植ゑちらした白玉山を電光形にぐんぐん登つて表忠塔下に來た。海拔四百八尺、新舊市街の中間に聳え立てる此の山の頂からは、旅順を一目に見晴し、東には茫茫たる海を眺め、表忠塔の建立場としては、げに絶好の位置である。遠望すれば、巨大な白蠟燭を山上に突立てた様な此の塔は、下を花崗石、上をコンクリートにして、高さ二百十五尺、如何にも美しい燈臺式の記念碑で、塔の頂上に電燈がつくと、十數里の海上から見えるといふことである。塔内は十階になつて、階段を踏んで登れるのだが、今日は時刻が

晩いため、登れなかつた。塔下の小苑に金盞花の赭黄色な花が、まだ霜にも枯れず咲いて居る。

表忠塔を背に、平たく削りならされた山頂を北へ歩いて鳥居をくゞり、石段を上り、納骨祠に詣でる。白玉山の北端に石垣を四角に築きあげ、上に小さな石造の祠が南面して立つて居る。白玉神社といふさうな。旅順を落す爲に命をすてた海陸軍人二萬二千七百餘の白骨が此の下に埋めてあるのだ。

何時しか落ちかゝつた日は紺色の雲の間から生々した血の色を見せて居る。と見れば、我等が立つ白玉山を繞る旅順界隈の山又山、狐の皮の如く霜枯れた裸山、破壊された砲

15050
400
14650
22
14430

5200
325
2030

14430
220
1215

1215
30
1185

敬
英
音
厂
作
用

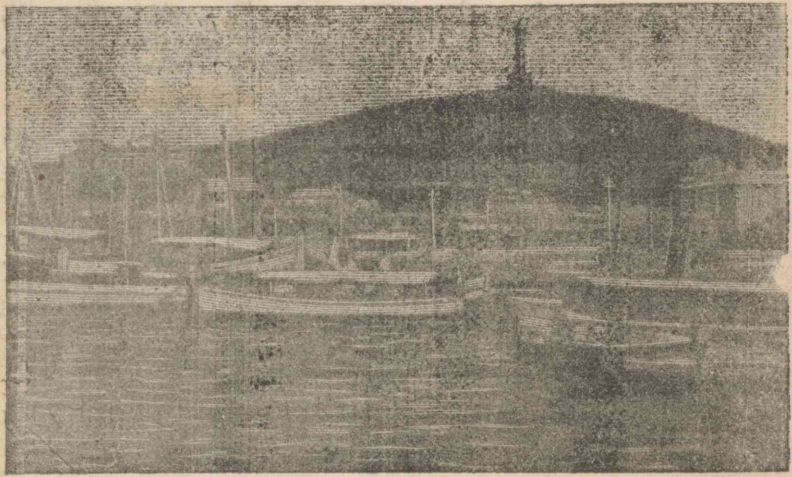


表 忠 塔

臺の山、生命の去つた荒寥たる山々は、雲間漏る落日の爲に赫として茶褐色に燃え切つた空氣の中に、毒々しい程はつきりとしたパノラマを現出した。其處に一發の砲聲も響かず、一聲の人語も聞えぬ。風すらも吹いては居らぬ。自然は鳴をしづめて居る。而して其の強烈な色彩を以て旅順の山河は今叫

喚をあげて居るのだ。十年前、二十年前、二度までも人の子を殺し合ふ修羅場となつて溺るゝ程に血を浴び、嘔くまでに血を飲まされた旅順の大地は、今夕陽に血を吐返し、死の苦みにもがいて居るのだ。氣息もつまるばかり凄慘の氣に打たれて、やゝ久しく納骨祠畔に佇む。血を吐く頻死のもがきは、やがて蒼ざめた死の黄昏に移つた。外套の襟を立てゝも、ぞく／＼する程空氣は冷えて來た。でもまだ去りもやらずそこに佇む。背後にもものゝけはひがする。牽かれるやうに振りかへる眼を、ばつと天來の光が射る。表忠塔が光り出したのである。

「あゝ光が。」

ほつと息をついて、塔を見上げた。二百十五尺の白塔の上
ぐるりについた電燈は、白い光の環をなして中空高く瞬き
つゝ、地よ望め、海よ仰げと、黄昏の空に耀いて居る。その光
はそも何を宣るか。「不死」でなくてはならぬ。

「不死」

白骨よ、眠れ。大地よ、黙せ。光は死なぬ。死なぬものが光
る。光は最後の勝利者である。
いさゝか慰められて納骨祠に別れて旅宿に歸つた。

(死の蔭に據る)

二七 梅

藤岡作太郎

藤岡作太郎
東圃と號す。
國文學者。
文學博士。
東京帝國大學
文科大學助教
授。
明治四十三年
一。歿す、年四十

固陰沍寒、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く標致す
るものは梅花にして、菊花の行く秋に後れて凋むと共に高
節遙かに群芳を抜く。牡丹は貴客、梅は隱士。彼は金屏を
廻らし七寶の花瓶に挿みて見るべく、此は茅舍竹籬牛の聲
する邊に尋ぬべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨は薔
薇に比して別に特長あり。冷艶玉を綴つて疎々たり。老
幹龍を横たへて偃蹇たり。清風雅韻百花の魁たるもの、こ
の花を描いて何かある。特質
支那の文人は酷だ梅花を好み。三國の末陸凱といへる
人これを江北の友に贈つて曰く、

連体形

折梅逢驛使 寄與隴頭人

江南無所有 聊贈一枝春

宋の時林和靖といへる高士西湖の畔に棲み梅を植ゑ鶴を飼へり。屢舟を湖中に泛べて遊ぶに客至れば童子鶴を縦つてこれを報ず。その梅を詠じたる句に「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」といへるは梅花詩中千古の絶唱と稱せらる。支那に於てわが國に於ても既に萬葉古今の歌集に梅花の詠多し。百

百磯城の

もしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる。萬葉集。

わが宿の

わが宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たり散りぬともよし。萬葉集。

色こそ

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えれ香やは隠る。古今集。

磯城の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊びわが宿の梅咲きたりと告げやれば好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に「色こそ見えね香やはかくる」と稱へ或は昔ながらの

人はいさ

人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香にほひける。古今集。

出てしるなげ 主人き宿となりぬとほひける。 軒端の梅よ。 春なせぬわえ。(実朝)

藤原公任

平安時代の歌人、學者。 四條大納言。 長久二年(七三三)薨す年七十六。

藤原公任また幼にして宮中に候して、

しらぐとしらけたる夜の月影に

雪かきわけて梅の花をる。

と詠みければ主上深く叡感まし、公任もまた生涯の思

出この時にありきといへりとぞ。

傳へ本姓いふ前九年の役安倍宗任捕虜となりて京師に入るに卿相雲客奥の夷のさこそ無骨なるらめいざ戯れて笑はん」とて一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず、

我が國の梅の花とは見つれども、

大宮人はなにといふらん。

と答へたるに一座し源平の亂らけて恥入りぬとなり。源平の亂、生田の森にて梶原景季片岡の梅の盛なるを手折り箆にさして奮戦せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も味方もやさしき武士の振舞かなと感じけりとかや。

梅が香や、隣は萩生惣右衛門。

生田の森
今神戸市の中
にあり。

萩生惣右衛門

徂徠と號す。
江戸の儒者。
享保十三年二
月、歿す年六
十三。

其角

榎本氏。
江戸の俳人。
寶永四年(三三
七)歿す年四十
七。

嵐雪

服部氏。
江戸の俳人。
寶永四年(三三
七)歿す年五十
四。

烈公

徳川齊昭。
水戸藩主。
勤王家。
萬延元年(三三
一)歿す年六十
一。

齋藤拙堂

名は正謙。
伊勢の漢學
者。
慶應元年(三三
九)歿す年六十
九。

とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩へて賛したるもの。

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ。

とは嵐雪が窓前の南枝に日々の春を占へるなり。水戸の烈公が梅を種片手ゑしより偕樂園片手は今に關東の名園となり、齋藤拙堂が記勝に寫されしより、月瀨は櫻の吉野と並べ稱せらるゝに至りぬ。

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人を友とすれば、遠寺の鐘聲霜に牙ゆ。一陣の暗香に驚いて顧みれば、見得たり瓶中の芳姿。これ晝間の散策に竹外の一枝を手折りもて來し家づとなりけり。(東圃遺稿)

春 破成 新生 佛蘭西紙舟 浅草より

二八 鶯

島崎藤村

長野縣人
島崎藤村
名は島崎。
詩人、小説家。
明治九年生。

さ は れ 空 し き さ へ づ り は、
（然るに空は）無益な事なりは、さして群を輩の無益な事なり、さして空のさへづりなり）

雀の群にまかせてよ、

うたふをきけや、鶯の、

すぎこし方の思出を、

はじめて谷を出でし時、

北風 さむく、霰降り、

うたふをきけや、鶯の、

行くへは雲に隠れてき、

露は緑の羽を閉ぢ、
霜は翅の花となる。
あしたに野邊の雪を噛み、
ゆふへに谷の水を飲む。
さむさに爪もこぼりはて、
絶えなんとする度ごとに、
また新なる世にいでて、
くしきいのちに歸りけり。

あゝ、枯菊に枕して、
冬のなげきを知らざらば、
誰が身にとめん、ふく風に、
にほひ亂るゝ梅が香を。

谷間の笹の葉を分けて、
凍れる露を飲まざらば、
誰が身にしめん白雪の、
下に萌え立つ若草を。
げに春の日ののどけさは、

雪の谷より出づる
こえちんげ
春のこころごと
誰かこころごと

火はくす

暗くて過ぎし冬の日を
思ひしのべる時にこそ、
いや楽しくもあるべけれ。

梅のこそめの花笠を
かざしつ酔ひつ歌ひつゝ、
さらば春風吹き来る
香の國に飛びて遊ばん。(藤村詩集)

二九 村上義光

さる程に、搦手の兵思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄

二九 村上義光

二五

花笠

鶯の笠に縫ふ
てふ梅の花、
折りてかざさ
ん老かくるや
と。古今集。

源常

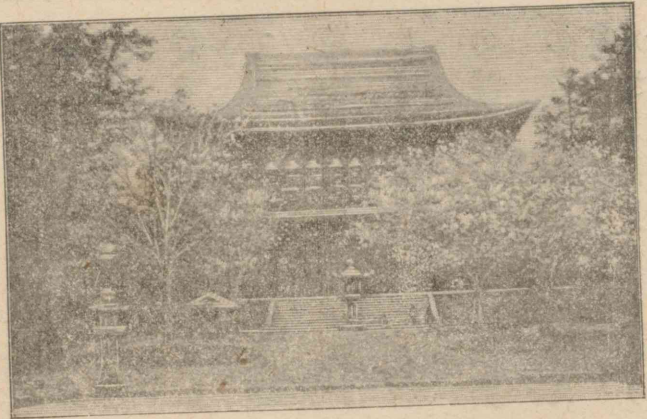
さる程に

後醍醐天皇元
弘三年閏二月
朔。
勝手の明神
大和國吉野郡
吉野山藏王堂
の奥の方にあ
り。

藏土堂
吉野山にあり
藏王権現を安
置す。

せて宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、
「今は遁れぬ處なり」と思召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋
緘の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく召され、龍頭の兜の
緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人、
前後左右に立ち、敵のむらがつて控へたる中へ走り懸り、東
西を拂ひ、南北へ追廻し、黒煙を立て、斬つて廻らせ給ふに、寄
手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬立てられ、木の葉の風に
散るが如く、四方の谷へ颯とひく。
敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並居させ給ひて、大幕打揚げ
て最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さ
き、二の御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の

如し。然れども、立つたる矢をも抜きたまはず、流るゝ血を



藏王堂樓門

も拭ひ給はず、敷皮の上に立ちな
から、大盃三度傾けさせ給へば、木
寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵
の首をさし貫いて宮の御前に畏
り、戈鋌劍戟を降らす事電光の如
くなり、磐石岩を飛ばす事春の雨
に相同じ。然りとは雖も、天帝の
身には近づかて、修羅かれが爲に
破らるゝと、はやしを揚げて舞ひた
る有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を

天帝
帝釋天王。
鴻門
支那陝西省西
安府にあり。
項伯
項羽の季父。
項莊
項羽の従弟。

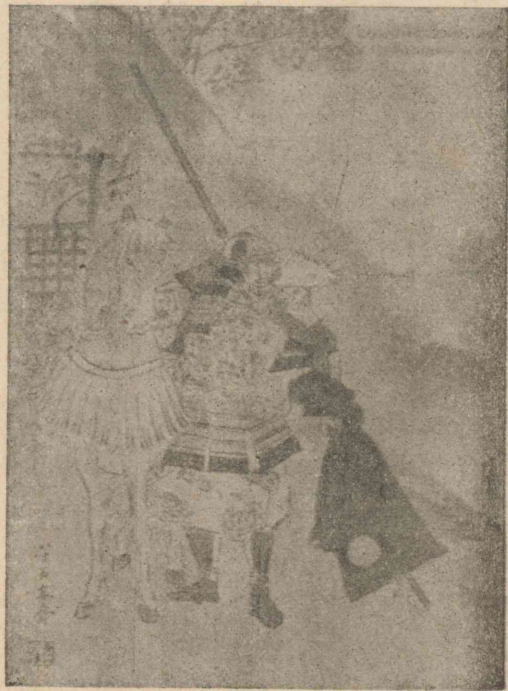
樊噲 漢の高祖劉邦
と同郷の人、
鴻門の會、項
羽を責めて高
祖の危きを救
ふ。

抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王
を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。耳を動かさず
大手の合戦急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞え
けるが、げにも其の戦に自ら相當ること多かりけりと見え
て、村上彦四郎義光鎧に立つ所の矢十六筋枯野にのこる冬
草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申
しけるは、追手の一の城戸いふがひなく攻破られつる間、二
の城戸に支へて數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴
の聲、すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既に
かさ^まに取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功
を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻

滎陽 支那河南省鄭
州にあり。
紀信 高祖項羽に圍
まれし時、高
祖と諱りて死
し、高祖の危
を脱せしむ。

し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべし
と存じ候。但し後に残り留つて戦ふ兵無くば、御所の落ち
させ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追懸け
參らせんと覺え候へば恐ある事にて候へども、召されて候
錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜つて、御諱の字を冒して
敵を欺き、御命に代り進らせ候はん。と申しければ、宮いかに
かさる事あるべき。死なば一所にてこそともかくもなら
め。と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、かゝる淺まし
き御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似
をして楚を欺かんと請ひしをば、高祖之を許し給ひ候はず
や。斯程にいふがひ無き御所存にて、天下の大事を思召し

立ちける事こそうたてけれ。はや、其の御物具を脱がせ給ひ候へ。」と申して御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもとや思召しけん、御物具鎧直垂まで脱ぎ替へさせて、「我若し生きたらば、汝が後世を弔ふべし。共に敵の手に罹らば、冥途までも同じ岐に伴ふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせたまへば、義光は二の城戸の



村 上 義 光 (菊池容齋筆)

高櫓に登り、遙かに見送り奉り、宮の御後影のかすかに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を切落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣のために滅ぼされ、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有様見置きて、汝等の武運忽ち盡きて腹を切らんとする時の手本にせよ。」と言ふまに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱いで、白く清げなる膚に刀を突立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切つて、腸つかんで櫓の板に投げつけ、太刀を口にくはへて、うつぶしに成り

天の川
大和國吉野郡の奥の地。十津川の上流天の川に沿へる部落

てぞ伏したりける。
追手搦手の寄手是を見て「すはや、大塔宮の御自害あるは。われさきに御首たまはらん。」とて、四方の圍を解きて一所に集る。其の間に、宮はひきたがへて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。(太平記)

村上浪六

名は信。小説家。明治元年生。

三〇 殿中の刃傷

村上浪六

元祿十四年三月十四日、白書院白書院に將軍勅旨奉答の式日、閣老有司の面々は素より、譜代外様あらゆる諸侯の總登城は巳の上刻。千代田千代田の春に武家の莊嚴を極め、關東の勢、柳營の威儀、廣々たる殿中今日を晴と出仕の席に従ひ順に就いて、

吉良上野介
名は義兵。高家の輩頭。

淺野内匠頭
名は長矩。播磨國赤穂城主。

勅使院使の御登營をいまかくと待ちうけぬ。別けて今日は公武周旋の典禮作法に出頭第一の老功たる吉良上野介、松の御廊下口を控へし一室の正面に着座して我なくばと四方見廻す體。
鬼畜に總身の肉を食まるゝ如き心地しながらも、遁るゝ道なき淺野内匠頭恐るゝ其の前に迂り出づれば、じろりと見て、

「ほゝう、昨日の問合に『長は無用』と申した上野の一言、今日許は神妙に守られて、烏帽子大紋を召されたな。萬事その通りに致さるれば、此の程より度々の御失禮もない筈ぢやに。」

「お言葉謹んで有難く承ります。就きまして内匠なほ一應差當り御指圖を。」

「何、差當つての指圖、如何様の儀で御座るの。」

「今日の御儀式に、傳奏方御着のみぎり、内匠の御役目として、お立關の式臺に御迎へ申上げませうや、たゞしは御式臺下にて御迎へ申上げませうや、御指圖を下さりまするやう。」

上野介さも訝しげの顔色、

「是は以ての外、怪しからぬ。内匠殿、お場所柄も辨へず、今日この老人を愚弄せらるゝか。」

餘りの案外に、内匠頭はつと驚きの面をあぐれば、其の面上

傳奏
傳奏柳原權大
納言資廉等勅
使として下向
す。

に冷笑ひの聲を含みて浴せかけ、

「此の上野を愚弄するでなく、若し眞實この場合に差迫つて、左程の事も御存じないとすれば、上を欺いて今回の大役を申受けられたも同然、指圖も指南も事に依りけり。」

五萬三千石の大名それで御用がつとまると思はるゝか。
疎忽千萬、

さらでも堪へ難き連日の遺恨に、夜の目も合はず無念の涙を呑み、只さへ忍び難き鬱憤に、頬は瘦せ顔は蒼ざめながら、重ねくの恥辱も御奉公大切の一念に、元來の癩癬短氣を抑へ來りしに、今又五萬三千石の祿盜人と言はんばかりに辱められし内匠頭、その儘伏して座を動かねど、びたりと支

へし兩手は我を忘れて拳を握り、頭を垂れし烏帽子は次第に打震ひ鷹の羽の大紋は袖に漣を寄するが如し。さもこそと心地よげに座を起ちし上野介。

折しも將軍家の生母たる桂昌院の御使番として、大奥より急ぎ足に來りし梶川與三兵衛、かくとは知らず内匠頭に向つて御用の打合せ。

「これは幸ひ淺野殿、上様御勅答の御儀式相濟みましたる節は、其の旨此の梶川までお知らせ下されまするやう。」
松の廊下を三四間の彼方まで走りし上野介俄に振返りて立戻りぬ。

「梶川殿何の御用かは存ぜぬが、桂昌院様よりとあれば、上

桂昌院
本莊宗子。
徳川家光に事
へ家綱を生
む。

野承らう。そこに居られる内匠殿では、作法萬端一向お分りにならぬ御人、心元ない。ありや近頃若耄碌せられたげぢや。」

伏したる内匠頭、むつくと起上るや否、大原實盛の小さき刀を抜く手も見せず、電光石火の勢、帛を裂くが如き痲癖の一聲、「おのれつ。」

躍りかゝつて上野の面上眞二つと打込みしが、餘りの悲憤に氣は焦りて拳は伸びたり。恨の切先は流れて、がちりと烏帽子の鐵輪。「無念」と踏みこんで、仆れし上を二の太刀に斬下げしうしろより、梶川與三兵衛むすと羽搔攻に組付きぬ。

「お場所柄で御座るぞ。亂心々々。」

内匠頭遁げゆく敵に血眼を注いで、さながら五臟六腑を絞り出す聲。

「らら、亂心致さぬ。武士の御情、お慈悲、お慈悲つ。」

如何に荒狂うて振放さんとするも、如何に藻搔いて追はんとするも、梶川與三兵衛は八萬騎中に聞えたる六尺有餘の大力無雙。あはれ、内匠頭は元來の瘦形に、連日連夜の疲れ果てし身。見すく、眼前に長蛇は逸せり。殿中は鼎の沸くが如く、上を下への大騒動。

間一髪、吉良上野介は危き命を拾うて、駈付けし品川豊後守に助けられ、お坊主の肩に掛けられて、高家衆の詰所へ連れ

こまれしが、日比の權威傲慢に似合はず、息も絶えぐなる老眼に血を浴びて連れゆかるゝ時、「お典醫、お典醫」と聲を顫はせながら夢中に唸りし體、餘りの見苦しさと小氣味よさとに、出逢ひし諸侯何れも微笑を含みぬ。

武運の末、後より梶川與三兵衛の大力に抱きとめられ、前より坊主の關久和に太刀の手を搦まれて、斯くまでの鬱憤も無念も萬事こゝに休せし内匠頭、其の儘御目付の天野傳四郎と曾根五郎兵衛とに護られ、蘇鐵の間に引かれて、杉戸の後に据ゑられしが、靜かに鬢の毛を撫上げ衣紋を繕ひし體、「流石に名家の生れなり」とて、見るもの思はず涙を催しぬ。

(元四十七士)

田山花袋
名は録瀾。
文學者。
明治四年生。

三一 松島

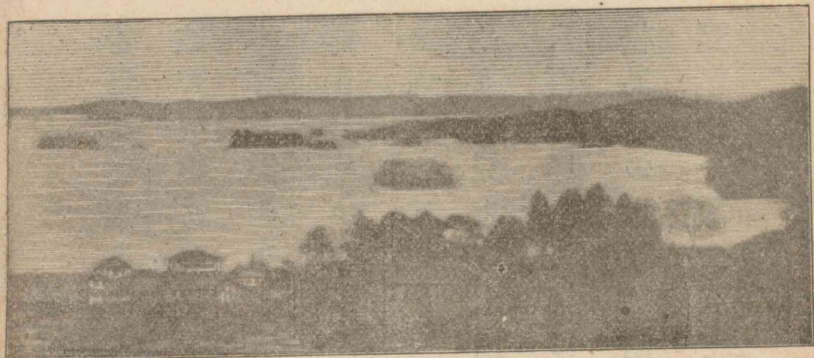
田山花袋

鹽竈の町は半ばは港で、半ばは漁市である。大漁模様のど
てらを着た漁夫が往來して居る。鹽竈の昔の竈、それから
長いく石階神社の境内は綺麗に掃除が届いて居て、參詣
の女達は蠟燭の燃え残りを社務所で買つてゐる。
深く入込んだ入江、そこに集つてゐる帆船や和船や荷足や
水脈は深く黒く流れて、潮は岸の旅舎の影を靜かに揺かす。
そこに松島遊覽のペンキ塗の小蒸氣船が沖から淡い煙を
靡かして入つて來る。酒を載せた小舟がたぶくと日に
照されて沖へ出て行く。石垣の上には長い竿を水に垂れ

て魚を釣つてゐるものなどがある。小さな蟹や舟蟲は磯
を這つて居る。

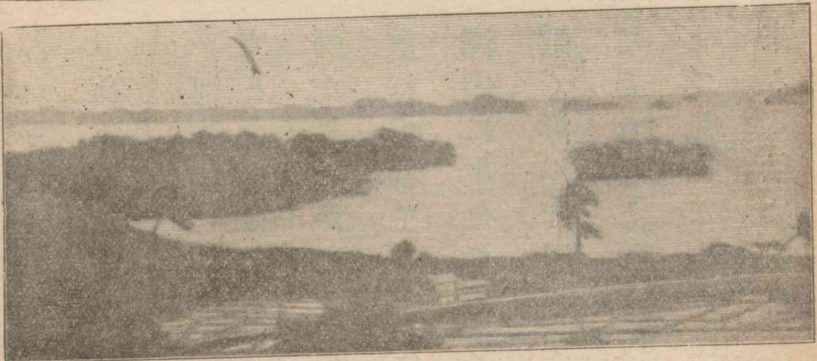
波が次第に高くなつて來た。少し沖に出ると、「あゝ金華山」
誰も彼も聲を揚げた。大きな水門の彼方に碧く鮮かに金
華山は指さされる。大洋に出て行く帆は斜に敲いて、兩方
から迫つた瀬戸の岸の山影がさながら入江を扼してゐる
やうに見える。白い波頭の立つのが處々に眺められる。
八百八島は次第に現はれて來る。

松島灣の水深は極めて淺い。最早老衰した入江である。
琵琶湖や霞ヶ浦と均しく、遠からず陸地になり、水田になつ
て了ふであらう。しかし流石に區域が廣いので、琵琶湖の



宮山よりの見

やうに水が錆びてゐない。處によつては深い大海と同じ碧を見ることが出来る。潤い複雑した變化ある氣分を受けることが出来る。しかしこれを橋立の外海の海の色と比べると、その生氣あり變化ある色彩は一籌を輸さなければならぬ。あの碧あの四面を取巻いた山、深い嵐氣あふふものはこの松島には求めることが出来ない。従つて水蒸氣の少ない空氣の乾いた日には、山も島も皆わ



たの松島

るく白ちやけて見える。島の松が赤ちやけてゐるのも佗しいやうな氣がした。海の碧が空の碧のために全く塗り消されて了つてゐる。あたりに高い山嶺のないといふことは松島の空氣を尠からず單調ならしめる。私は三度松島に遊んだ。その中で最近に行つた時が一番水蒸氣の多い時であつた。「こんなに綺麗に見える事もあるのか」と私は思つた。私は五大堂と相對した大きな旅舎の三階の一

間から蒲團の中にくるまりながら朝の鮮かな静かな景色を眺めることが出来た。薄い霧の中から、日のまだ上らない曉の薄い被衣のやうな霧の中から、一つく島が現れて来るさまは何とも言はれない。

静かだ、いかにも静かだ。時は春先の三月の末で、どてらを重ねて着ても、まだ寒い位であつた。前には名物の實竹の(福満)澤山に生えてゐる島があつて、その向ふに大きな島が黒く碧く浮んで居るが、そこに最初の朝日の光が先づさして、見てゐるとそれが段々霧の中に美しいかゞやきを展げて、今まで見えなかつた島の影が其處にも此處にも見え出して来る。私は立つて眺め盡した。この眺望を更に一層大き

くしたのが新富山の眺望で、更に又それを大きく廣くしたのが富山の眺望である。觀瀾亭は伊達政宗が太閤の伏見城の一室を頂戴してそれで造つた瀟洒な亭だが、そこから見た眺は旅舎の三階で眺めたよりも、もつと漁村らしい感じを持つてゐて、岸と汀線と松と島との調和がいかにもよく一致してゐる。

富山の上の大仰寺の庭から眺めた形は、橋立を笠松から眺めた形に似てゐる。松島を平凡だと言ふ人もこゝへ來ると、皆驚いて兜を脱いで了ふのが例だ。實際其處から見た規模は大きい。此處ではもう島を眺めるのではない、八百八島を持つた美しい海を眺めるのである。その四周を取

卷いた山嶺を眺めるのである。潤い天地の中に浮んだ大きなバナラマを眺めるのである。其處からは金華山も見えれば、西を劃る大きな脊梁山脈も見える。一面に海に輝き渡つた夕日の影の下には、島は皆黒く重り合つて見える。遊覧の小蒸氣船が一艘長い痕を水面に曳いて、そして靜かにこの灣内を航行して行く。(山水小記)

三二 氷川清話

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも来い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すれば

勝海舟
名は安秀。
政治家。
海軍卿。
樞密顧問官。
明治三十二年
薨す、年七十
七。

するほど面白みがついて来て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。ど



勝海舟

うせうかかうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出来なければ何度でも出来る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就す

る前には、や根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出来ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心

の貫徹する時機が来て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来たものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

以て三月官軍と鋒至品川十中より
三使野中の令あり同日十日と鋒至品川
道一は以て希ふ余喜將薩摩の師と到

(帖友亡) 蹟筆舟海勝

そこに行くくと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵身方であつたといふことは何處へか忘れてしまつ

筆蹟

尊翰拜誦仕候
陳は只今田町
迄御來駕被成
下候段爲御知
被下早速罷出
候様可仕候間
何卒御待居被
下度此旨御受
迄如此御座候
頓首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

多謝お情を
望全田丁点す
うまをわがわが
多色をわがわが
のちのちをわがわが
心まじしめをわがわが
三月十四日
安房守様

西郷南洲書翰(亡友帖)

たやうだ。其の度胸の大きいことには自分もほとく感心した。

官軍が品川まで押寄せて来ていまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内

されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子はすこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挾まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」とかういふのだ。西郷のこの一言で江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや、貴様のいふ事は自家撞着だ。」

社稷
(京之廟)

とか「言行不一致だ」とか、澤山の暴徒があゝの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある」とか色々喧しく責立てるに違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明と大事に處する斷とをもつてゐた。

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ來て竊に様子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし／＼と詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物凄しい程であつた。然るに西郷は泰然としてあたりの光景は少しも眼に入らぬものゝごとく、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると

近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて来たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海潤で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で、外國の事情などは却て自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては、絶倫と謂ふべく、議論も

何もあつたものではなかつた。(氷川清話)

三三 南洲遺訓

西郷 南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来る様に思へども、策略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝ者ぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば、成功は早き者なり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛すまじきものなり。

過を改むるに自ら過てりと思ひつかば、それにてよし、その事をば棄て、顧みず、直ちに一步踏出すべし。過をくやくしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割り、その缺を集め、合せ見ると同じ事にて詮なき事なり。



四 郷 隆 盛

命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰悦服せらるゝものは只是一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に獨り曾我兄弟のみ今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも後世必ず知己ある者なり。(日本陽明學派之哲學)

尾崎行雄

學堂と號す。
政治家。
嘗て東京市
長・文部大
臣・司法大臣
たり。
安政六年(三五)
ひ生

三四 西郷南洲論 その一 尾崎行雄

有史以來時を閱する幾千載、所謂英雄豪傑も亦多し。或は名言徳行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而して皆能く多少の聲望を當世に繋ぎ、渴仰を後昆に得ざるは無し。而して其の聲望渴仰の深淺大小を較ぶるに、亦多く言行事業の大小深淺に伴ふものあるが如し。獨り吾が西郷南洲に至つては、古來の英豪と全く選を殊にし、徳望の隆洽なること遠く其の言行事業の上に出づるを見る。南洲の言行欽すべからざるに非ず、事業慕ふ可からざるにあらず。但其の言行事業は未だ彼が如き徳望を博するに値せざるを思ふ。我此の疑問を懷いて左思右考するもの

多年之を先輩に質し、之を史籍に稽へ、種々の方面より解釋を試みて遂に獲る所なし。竊に以て憾となす。然るに偶然の感興は一朝にして倏ち多年の疑問を氷解せり。曾て東京市立養育院を巡視す。收容する所は皆是貧苦にして自立すること能はざる者に係るといへども、熟其の貌を視るに、富貴の相を具へて爾く貧困なるべからざるもの間之あり。之を當局者に諮るに、果然彼等の中には高等官の職に在りしものあり、巨萬の富を擁せしものあり。しかるに不期の變に遇ふに方りて直ちに養育院中の人となるは榮枯の變化亦激しからずや。人各親屬あり、故舊あり、艱難相濟ひ、變災相弔して、容易く凍餒の甚だしきに至らず。

此の輩にして獨り艱難を濟ひ、變災を弔する親屬故舊なしといふは頗る奇とすべし。是に於てか思へらく、墮落此の極に及ぶものは其の身に固有の性癖ありて自ら不幸を招致するにあらざるなきを得んや」と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、「入院者一般に通ずる特質と稱すべきものあらんか。若しこれあらば願はくは與り聞くを得ん」と。余は卒然として疑問を發したりといへども、翻つて又思へらく、「是蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に豊なるを以てすとも、或は直ちに答へ難からん」と。而も當局者は聲に應じて對へて曰く、「然り、洵にこれあり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら抑制すること能はざるもの、即

ち一般に通ずる性癖なり」と。余は其の應答の甚だ速なるに驚くと共に、一種の感興は油然而として湧けり。而して之と同時に回憶したるものを西郷南洲とす。

身高等官の位置に在りといへども、家に巨萬の富を擁すといへども、苟も他人に對して同情を缺き、獻身の熱誠なくんば、他人亦白眼を以て我を視る、一朝蹉跌に遭ひて凍餒するも亦顧みるものなき所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざること影の形に隨ふが如きものあるを。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同情を缺く者の遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、其の裏面に於て徳望の歸する、亦由

つて來る所あるを推すべし。而して南洲の面目始めて髣髴たるを得るに庶幾からんか。

三五 西郷南洲論 その二

尾崎行雄

甲東
大久保利通
松菊
木戸孝九
藤
伊藤博文
隈
大隈重信

之を維新の諸豪に觀るに、南洲の果斷明決は甲東に如かず、謀慮周密は松菊に如かず、若しそれ學藝才辯に至つては藤隈二君に如かざること遠かるべし。而も挺然として群を抜き、望を負ふこと、猶衆星の北斗に共ふが如きものありしは何ぞや。

征韓の議破れて急流を勇退し、孤馬に鞭ちて帝都を去るも毫も怨嗟の風なく、悠悠たる覺城の天、犬を逐ひ、兎を獵して

丁丑
明治十年

閑適自ら遣る。此の間誰か叛心を藏すといはん。若し眞に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり、丁丑の歳を待たずして乗すべきの好機に乏しからず。況や重望彼が如きを以てして、干戈の外に施すべき好機方策なしといはんや。今に及ぶまで彼が叛跡を云々するは、未だ以て英雄の心事を解する者にあらず。

彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共にし、水火に出入し、愛子友弟に等しき配下に對するに於てをや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲のみ。世或は月照の死に對して西郷を議するものありと雖も、我を以て之を見るに、唯其の跼天躅地の志士を憐む情に

4 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200

勝へず、之を救ふ道なきがため、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩臆測を逞しうして、種々の言議を挾むが如きは、英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。人心の歸服を得んとして恩を施し惠を加へ、強ひて笑を賣る者は、現に吾人の目撃する所、而して遂に南洲の萬一を庶幾すること能はざるは、多く人工の假作に出でて性情の自然に基づかざればなり。塗粉は久しからずして剝落す、人工の假作は永く本來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力或は其の作用を鈍うす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事に關する軀を遺れて一故

舊の爲に死を決し、百二都城の子弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘んず。大局の打算を誤るを笑ふ勿れ、兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる所以、是に在りて、而して人の偉大なる所以、亦實に是に存す。一々利益を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らならば、他人亦此の如くにして我に對せん。其の自ら衣食する能はざるに及んで、直ちに養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を無みし、軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るものなくとも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐ者を同情といひ、他より返る者を人望といふ。もとこれ一物にして、二

あるに非ず。偉大ならんことを欲せば、先づ其の仁心を修養するを要す。人の冷酷を怨み、世の澆季せうきを歎じて、其の極社會の組織を非議する者は、恐らくは自ら省察するを急とすべし。我一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信ずるが故に、記して少年子弟研鑽の料に資す。(讀賣新聞)

同情必要
社會の事

師範學校 國文教科書 本科用卷二終

師範學校 國文教科書 本科用卷二附錄

第二篇 漢字

一 漢字の起原

表音文字

表形文字

漢字の起原には象形・指事・會意・諧聲の四つの形式あり。更にその用途を廣むるに轉注・假借の二つの形式あり。之を合せて六書とす。六書は漢字の構造及び使用を説明する分類法なり。

象形 有形の物體の形に象りて作れる漢字を象形といふ。

- 日 月 山 水 木 艸 魚 鳥 弓 刀
- 夕 冫 木 艸 魚 鳥 弓 刀

指事

象形は漢字の最も原始的なるものなり。
象形の漢字はその數多からず、凡そ六百餘字なりといふ。蓋し有形の物體は多けれど、其の微細なる差別は到底象形文字を以て之を表はし得べからざれば象形文字は割合に少きなり。

指事 無形の事柄を形に託して指し示せる漢字を指事といふ。

一 二 上 下 末 本

指事の漢字はその數最も少なく、凡そ百餘字に過ぎず。是の製作の工夫容易ならざればなるべし。

象形指事は漢字の單元にしてその單純なる形なり。之を字と區別しては文といふことあり。

會意

會意 二箇以上の既成文字を連ねて一字となし、もとの意を會合して新に一義をなせる漢字を會意といふ。

林 赫 炎 森

諧聲

右は同字を二字又は三字連ねたる會意なり。

明 鳴 味 伐 盟 解

右は異字を二字又は三字連ねたる會意なり。

會意の文字の音は之を組成せる個々の文字の音に拘らず全く異なる音をあらはすものなり。

會意に屬する漢字はその數多からず、凡そ七百餘字なりといふ。

諧聲 二箇以上の既成文字を連ねて一字となし、原字の一は意義を表し、一は音聲を示す漢字を諧聲といふ。

江 河 猫 狗

右は右聲左義の諧聲なり。

鳩 鷓 項 頭

右は左聲右義の諧聲なり。

資 貸 忿 慙

右は上聲下義の諧聲なり。

蓮 荷 竿 箭

右は下聲上義の諧聲なり。

圃 園 閣 閨

右は内聲外義の諧聲なり。

衡 輿 問 悶

右は外聲内義の諧聲なり。

諧聲は一半音を表し、一半義を表すが故に、文字を増殖する上に於て最も便利にして且明瞭なるものなり。無形の事柄は勿論、有形の物體にても象形にて表し難き語は多くこの法による。従つて漢字の十分九は諧聲に屬すといふ。

諧聲の義を表す部分を音を表す部分と誤り、又は會意を諧聲と誤り讀む時は發音を濫るべし。俗に之を百姓讀といふ。

會意諧聲は象形又は指事を連合して作れる合字なり。之を文と區別しては字といふことあり。

轉注

象形指事會意諧聲の四法を以て新なる漢字を製作す。而して在來の文字を他義に流用するは轉注假借の二法によるなり。轉注 文字の本義を類似せる他の意義に轉用するを轉注といふ。

美好 好惡 號令 縣令

右は義を轉ずれども音を變せざる轉注なり。

音樂 快樂 善惡 好惡

右は義を轉ずると共に音も變ずる轉注なり。

假借 在來の文字の音を假りて、その本義と無關係なる他の意義に用ふるを假借といふ。

俎豆 豆腐 皮革 改革

漢字を以て外國語を寫すときは單にその音を表はすのみにて全く意義を

假借

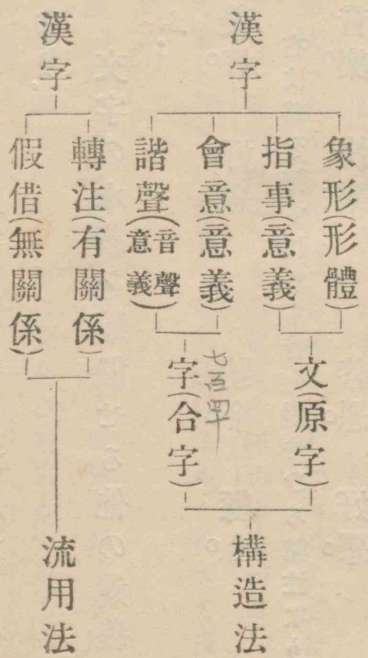
有せざる文字となる。これまた一種の假借といふべし。

印度 比丘 奈落 瓦斯 倫敦 華盛頓

我が假名の如きも六書よりいへば一種の假借といふべし。

六書の説右の如しと雖も今日にてはその成立の詳ならざる漢字も固より
尠からずとす。

今試に漢字の成立を表示すれば左の如し。



二 漢字の變遷

古文
大篆
小篆
隸書
楷書
行書
草書

漢字の始めて製作せられしより凡そ四千年に及ぶを以て其の間に字體の變遷尠からず。その最も古きは古文なり。そは當時筆紙の發明なく、漆液を以て竹簡に書したるにより、文字の頭圓く大きく、尾細くしてその形蛙の子に似たれば科斗の文字ともいふ。周の世に至りては古文を變じて大篆を作り、秦の世に大篆の繁雜なるを省きて小篆を作る。同じく、秦の世にまた小篆を省略して隸書を作る。小篆は今も印璽碑額等に用ひ、隸書も碑額等に用ふることあり。秦漢以來毛筆及び紙の發明ありしによりその字體も次第に整頓し、後漢の頃より隸書などの筆勢を變化して作り出したる楷行草の三體は、その後遂に常用の字體となりて以て今日に至れるなり。

正體	處	將狀牀獎醬壯莊藏	蹤	稱	篠	眞慎楨鎖顛		
別體	処	將狀牀獎醬壯莊藏	踪	称	筱	真慎楨鎖顛		
正體	盡	儘燼	聲	雙	卽節	屬囑		
別體	盡	仄焮	声	双	卽節	属囑		
正體	體	斷繼	蟲	珍	鐵	兔	燈	
別體	躰	断繼	虫	玕	鉄	兔	灯	
正體	粘							
別體	粘							
正體	麥	麩麩麵	廟	毘繩蠅	佛	竝	寶	貌
別體	麦	麩麩麵	廟	毘繩蠅	仏	並	宝	兒
正體	萬	密蜜						
別體	万	密蜜						

異字別體

正體	與歟							
別體	与歟							
正體	覽							
別體	覽							
正體	龍	瀧籠籠	糧	兩	麗	禮		
別體	竜	滝籠籠	糧	兩	麗	礼		

本來は全く異なる文字なれども慣用に従ひ別體として用ふるも妨なきものあり。左の如し。

正體	醫	音イ。	證	音ショウ。	託	音タク。
別體	医	音エイ。	証	音セイ。	托	音タク。
正體	膽	音タン。	擔	音タン。	豐	音ホウ。
別體	胆	音タン。	担	音タン。	豊	音レイ。

訓うつば。矢を盛る器。訓いさむ。諫む。拓に同じ。神前の供物。

同字別義

本來は同じ文字なれど、慣用上、用法に限ありて殆ど別字の如くなれるものあり。

箇	條	巖	句	驅	華	邪
所	いは	いは	讀	逐	美	正
一人	いは	いは	引	足	繁	魔
笑	笑	娘	疎	著	肉	徧
止	令	達	通	顯	牛	あまわし
咲	咲	疎	辯	到	食	
分	分	精	遠	物	戸	遍
						百

轉換同字

漢字にはその扁旁冠脚等の位置を轉換して妨なきものあり、轉換すれば別字となるものあり。而して轉換すれば文字をなさざるもの固より多し。漢字の部分を換置するも妨なきもの左の如し。

轉換別字

正體 鞏 鷲 峨 槩 岬 碁 胃 羣 稟 秋 松 蘇 摸 峯 懸 略 鄰 和
 別體 鞍 鵝 峩 概 崖 棋 胸 群 稿 焮 恣 蕞 摹 峰 綿 畧 隣 味

漢字の部分を換置すれば別字となるもの左の如し。

數に關する文字

怡 盱 棘 衿 吟 拾 俳 眇 腑 紋 愉 猶
 怠 旱 棗 衾 含 拿 悲 省 腐 紊 愈 猷

數の單位をあらはすに用ふる時に限りて別體を用ふも妨なき漢字あり。左の如し。

相似字

正體 圓 貫 錢 町 釐
 別體 田 𠂔 𠂔 丁 厘

字形の類似せる漢字は讀むにも書くにも正確に區別せざるべからず。

今其の重なるものを左に示す。

易 場 惕 惕 錫 賜

易 場 湯 楊 揚 陽 颺 腸 暢 傷 觴

干 汗 竿 肝 奸 旱 悍 軒 刊 罕 幹 軒

于 汗 竿 宇 芋 孟 迂

各 陷 昭 韶 炤 詔

各 稻 滔 蹈 鞫

求 球 救 裘

朮 忱 述 術

岡 綱 鋼 剛

罔 網 惘

壺 壺

帥 帥

且 且

且 且

承 承

亟 亟

商 商

商 商

束 束

狙 狙 阻 阻 狙 狙 祖 祖 租 租 粗 粗 組 組 組 查

但 坦 担 袒 袒 袒

蒸 蒸

極 極

摘 滴 嫡 鐫 敵 適

刺 喇 辣 懶 瀨 癩 籟 懶 敕 速 悚 激 整

束シ 刺棘棗策シキソウサク

段ダン 鍛鍛ダンダン

段ダン 假假暇蝦霞遐カカカカカカ

奴ヌ 怒努孥弩驚叟ヌヌヌヌヌヌ

如ジ 恕絮洳ジジジ

東トウ 棟凍トウトウ

東トウ 棟凍トウトウ

班ハン 棟凍トウトウ

班ハン 棟凍トウトウ

專セン 傳搏博縛簿センセンセンセン

專セン 傳搏博縛簿センセンセンセン

手テ 蚌烽蜂鋒峯逢蓬テテテテテテ

巾キン 降絳キンキン

麻マ 痲摩磨靡糜ママママママ

林リン 痲淋霖禁焚楚リンリンリンリン

小ショウ 忝添恭慕ショウショウ

水スイ 暴瀑曝爆漆膝泰黍藤黎スイスイスイスイ

右は二字相似たるものなり。

己キ 紀記杞起忌妃配改キキキキキキ

巳シ 祀熙選撰シシシシ

母ボ 毒瑋ボボ

母 貫 貫 實

母 每 梅 海 悔 晦 誨 敏

右は三字相似たるものなり。

戊 戊 戊 茂

戊 越 越 鉞

戌 戌

戌 蓑 蓑 襪

右は四字相似たるものなり。

四 漢字の部首

部首とは漢字を組立つる單元にして之を片旁冠脚等の各部に分つ。漢字の字書は多く部首分類の法を用ふ。

扁

漢字はその數五萬に近しと雖も今日我が國にて常に用ふるものは五千内外なるべし。而して之をその成立上より分類すれば六書となれども、六書を區別するは容易ならず又音韻によりて分類する法もあれど、音韻の學に通せざればなし難し。部首分類を便とする所以なり。國定尋常小學讀本に用ひたる漢字は千三百六十字なり。部首は二百餘あり。その中普通の名稱あるもの左の如し。し扁は漢字の左側にある部首にして、連筆上筆を着くる初めなり。

人 人 扁	二 水	小 邑 扁	口 口 扁	土 土 扁	女 女 扁
子 子 扁	山 山 扁	巾 巾 扁	弓 弓 扁	彳 行 人 扁	彡 三 水
小 立 心 扁	才 手 扁	豸 獸 扁	日 日 扁	月 月 扁	月 肉 月
木 木 扁	歹 歹 扁	止 止 扁	火 火 扁	月 將 扁	片 片 扁
牛 牛 扁	王 玉 扁	田 田 扁	目 目 扁	予 予 扁	矢 矢 扁

四 漢字の部首

旁

石 石扁
示 示扁
禾 禾木扁
立 立扁
夕 夕扁
衣 衣扁

米 米扁
糸 糸扁
缶 缶扁
羊 羊扁
未 未扁
耳 耳扁

舌 舌扁
舟 舟扁
虫 虫扁
角 角扁
言 言扁
豆 豆扁

豸 豸扁
貝 貝扁
足 足扁
身 身扁
車 車扁
酉 酉扁

采 采米扁
里 里扁
金 金扁
革 革扁
食 食扁
馬 馬扁

骨 骨扁
鬲 鬲扁
魚 魚扁
鼻 鼻扁
齒 齒扁

旁は漢字の右側にある部首にして、筆を止むる處なり。

リ 立刀
斤 斤扁
欠 欠扁
斗 斗扁
戈 戈扁

支 支扁
斤 斤扁
欠 欠扁
斗 斗扁
皮 皮扁

聿 聿扁
貝 貝扁
酉 酉扁
佳 佳扁
章 章扁
頁 頁扁

鳥 鳥扁

冠

冠は漢字の上部をなす部首にして起筆にあり。

一 卦算冠
穴 穴冠
小 小冠
日 日冠
水 水冠
雨 雨冠

竹 竹冠
艸 艸冠
雨 雨冠

脚は漢字の下部にある部首にして、收筆に屬す。

垂

垂 漢字の上部より右側に垂れ下りたる部首にして、起筆に屬す。

遠

遠は漢字の右側より底部を包み遠れる部首にして、多く收筆に屬す。

乙 乙遠
凡 凡遠
几 几遠
夕 夕遠
延 延遠
支 支遠

尸 尸冠
尸 尸冠
尸 尸冠
尸 尸冠
尸 尸冠
尸 尸冠

疒 疒扁
疒 疒扁
疒 疒扁
疒 疒扁
疒 疒扁
疒 疒扁



広島大学図書

2000065472



4
72

和
聖
琴